



第 64 回甲府中学・甲府一高東京同窓会記念誌



vol.30

# 日新鐘

継往開来  
～繋ごう未来へ～



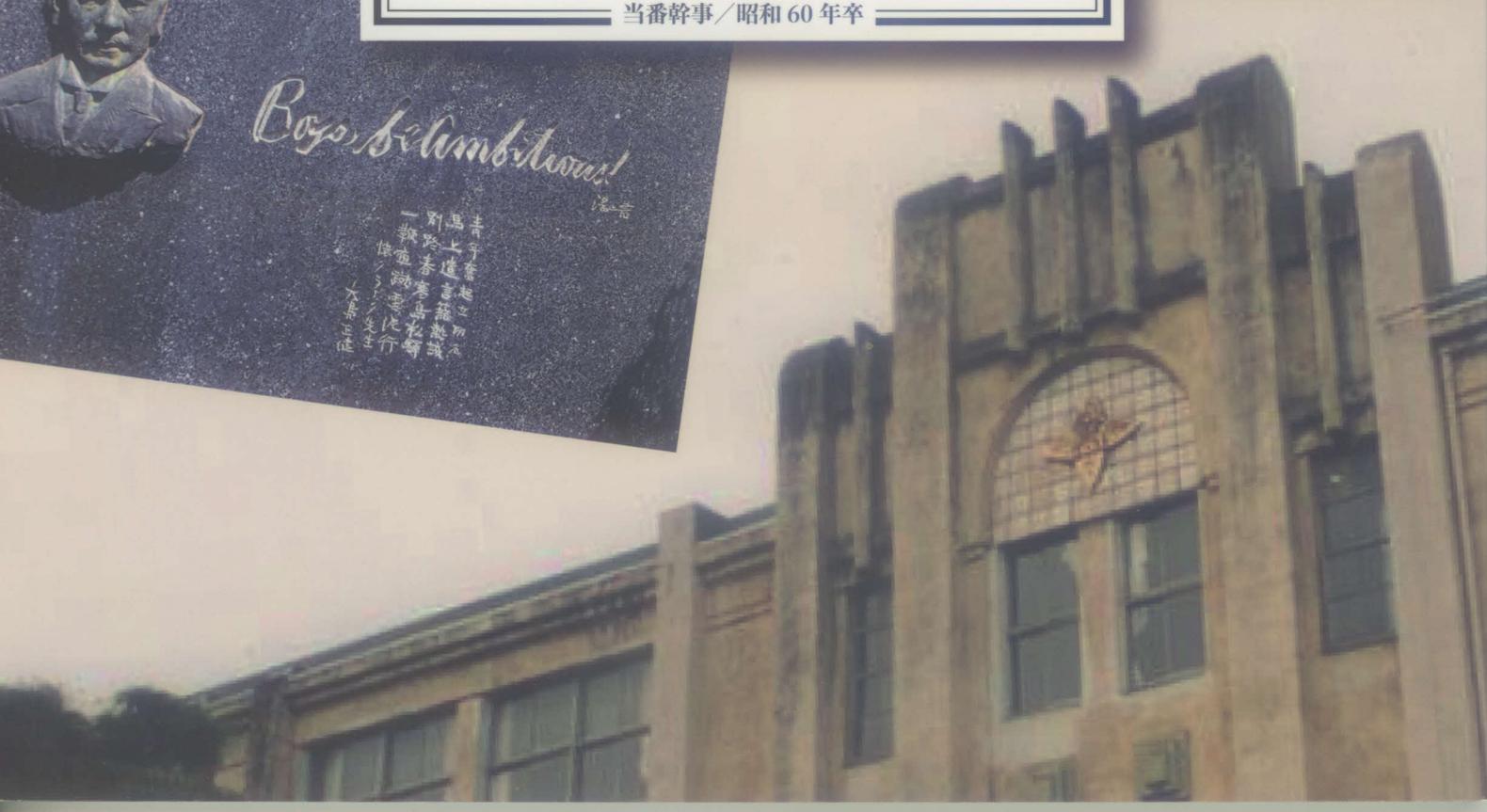
Kofu First Highschool Tokyo Reunion

当番幹事 / 昭和 60 年卒



*Boys, be ambitious!*

青学奮起の物  
馬士達言藤野  
一報而身松等  
偉大なる先生  
大島三雄



環境への想いをかたちに



真心と確かな技術

株式会社 **早野組**



本社 ■〒400-0807 山梨県甲府市東光寺一丁目4-10  
TEL.055-235-1111(代) FAX.055-235-1109  
■営業本部 TEL.055-232-8686  
■早野リパブル TEL.055-268-3333

■東京支店  
■中部支店  
■新宿営業所  
■静岡営業所

東京都八王子市千人町二丁目5-24  
長野県飯田市上郷飯沼1438-19「ソノ」1階  
東京都新宿区四谷二丁目117「スト」7階  
静岡県富士宮市外神2219-1「リバーサイド」外神202号室

TEL(042)667-8800 FAX 667-9497  
TEL(0265)22-3969 FAX 52-2171  
TEL(03)3352-8700 FAX 3352-8710  
TEL(0544)66-5454 FAX 66-5455

URL <https://www.hayano.co.jp>

記念誌

# 日新鐘

Vol.30

目次

# 継往開来

繋ごう未来へ



第64回  
甲府中学・甲府一高  
東京同窓会

校歌・応援歌

ご挨拶

一高風景

応援団不在？令和の応援練習

日新館で食べてみた

大先輩の銅像を訪ねてみました

一紅会

あおぞら共和国感謝の集い レポート

甲府一高湘南同窓会 出席レポート

寄稿（昭和60年卒同窓生）

故郷と共に生きるために

〜未来へ繋ぐ先人からのメッセージ〜 秋山尚之

継往開来〜人との出会いが人をつくる〜 井上貴美

高校時代を振り返って・功刀清二

数学教育の未来・清水宏幸

電機メーカー勤務を振り返って・出羽隆治

健常者と障害者の真ん中にある音楽・富山美由紀

一高って最高！（一高は最高の学び場）・福島三千代

筋書きなしのワンダーランド・甲府一高・・・

実はみんな一高が大好きだった・藤原剛

継往開来〜繋ごう未来へ〜

「想像を超える未来を切り拓く」・山口雅男

経験から学び、そして伝える・渡辺俊一

編集後記

広告

64	38	37	35	33	30	29	27	26	25	24	22	21	20	18	17	16	8	6	4	2
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---

## 今 の甲府第一高等学校を動画で紹介

当記念誌では、実際の様子や説明などをスマートフォンで動画をご覧になれます。

動画をご覧になる際には「COCOAR(無料)」のアプリが必要となります。スマートフォンから「COCOAR」を検索・インストールしてください。

### 写真から動画を見る

- ・11ページ(応援練習の様子①)
- ・14ページ(応援練習の様子②)

『COCOAR』を起動し、カメラマークの写真をスキャンすると動画がスタートします。

### COCOAR画面



### QR から動画を見る

- ・17ページ  
(大先輩の銅像について)

QRコードを、スマホでスキャンすると『COCOAR』が自動で起動し、動画がスタートします。

# 山梨縣立甲府中學校校歌

昭和三年十月二十三日制定

作詞／三井 甲之

作曲／東京高等音樂學院

一、我等は日本に生まれたり

神の御代より一系の

皇統戴く我國に

生れしことのうれしさよ

皇國の榮えは天地と

共に窮りなかるべし

二、大和島根に山めぐる

甲斐の國あり水清き

郷土の歴史顧みよ

我等の務め輕からず

見よや南に富士ヶ嶺は

皇國の鎮めと聳えたり

三、大海原の揺りやまぬ

波をも風をも凌ぎつつ

護れ皇國を諸共に

國民擧りて國のため

撓まず萎縮まず辟易がず

進むぞ大和ごころなる

# 山梨県立甲府第一高等学校校歌

昭和二十三年十月二十二日制定

作詞／上条 馨

作曲／小松 清

一、甲斐の國 み中に建ちて

古へゆ 雄心傳へ

新しき 世の鑑とし

勉めてむ この學舎に

二、日に新た また日に新た

彌高き のぞみをもちて

眞なる 理究め

勵みなむ 若人我等

三、聳え立つ 芙蓉の高根

清き哉 甲斐の山川

もろともに 玉と磨きて

贊くべし 天地の化育



## 起て撃て勝て

起て撃て勝て

甲府一高 一高

その名ぞ我が母校

仰ぐ芙蓉の峰さやか

穹天まさに轟かむ

見よ精鋭の集へるを

結べる眉に必勝の

誓ひは固しわれらが精鋭

おお

起て撃て勝て

甲府一高 一高

その名ぞ我が母校

## 希望の光

一、希望の光 身に浴びて

若人の意気負うて立つ

いま選手等の門出を

空もとどろに 応ふらん

二、敵軍いかに 猛くとも

忍び伏せたる梓弓

鍛えし腕引きしぼり

敵のかぶとを 射落さん

三、見よ穹天の 雲は垂れ

覇権を握るは今なるぞ

蚊竜の意気胸に秘め

いざや起て起て わが選手

## 鶴城に

一、鶴城に桜花咲き

人は皆歡樂に酔ふ

われ一人落花を浴びて

前の恥花園に泣きぬ

二、秋来る健児の胸に

強き意気宇宙も空し

桜花の旗ひとたび振れば

醜の群れ微塵に飛ばむ

ヤツツケロ ヤツツケロ

ヤツツケ ヤツツケ

ヤツツケロ

## お御崎さん

お御崎さんの神主が

おみくじ引いて

申すには

いつも一高

勝ち勝ち

勝ち勝ち

ソレ勝ち勝ち

ソレ勝ち勝ち



一高HPの校歌・応援歌を  
聴くことができます



## 日新鐘に寄せて

東京同窓会  
会長 清水 昭

第63回東京同窓会は『集おう 語ろう つながろう！』をテーマに開催した。周到な準備が功を奏し、趣向を凝らした懇親会では、当番幹事らの願い通り、昭和から平成の、世代も生き方も多彩な同窓生がはじめて知り合い、新たな絆が育まれたと感じることが出来た。

準備にあたった森川茂樹当番幹事長、中田正久事務局長、昭和59卒当番幹事に心から御礼を申し上げる。

懇親会部会が企画したアンケートの回答の一つに、母校のレベルアップのための提言と支援の強化は図れないかという、昭和卒からの提案があった。

総会終了後に安達 徹校長より、母校が文部科学省のWWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業の拠点校に指定されたので、来たる（2023年）9月23日（土）に「一探国際会議」を県内高校及び県外高校2校、海外高校2校に呼びかけて開催する「環境・貧困・人権・外交・戦争」をテーマに国際社会が抱える課題について見識を深め、高校生として考えようという企画に対して、協力要請があった。そこで「森は海の恋人」運動の創始者で、牡蠣漁師の畠山重篤先生を基調講演に招いた。畑山先生は森林の腐葉土でつくられる「フルボ酸鉄」が川を通り海に流れ、海産物の餌となるプランクトンが豊かになること、さらに地球温暖化対策に繋がる可能性を示唆され、森里川海を自然に近い形にしておく意味を説かれた。東京同窓会からは志村昌也顧問、中嶋文夫副会長、島田敏男氏が各分科会の助言者として加わって頂き、後輩たちと意見を交わしていた。その模様は翌日の山梨日日新聞でも「世界の課題 見識深める」と題して

取り上げられた。

東京同窓会として母校生徒との交流が出来た嬉しいイベントであったので紹介する。

さて今年のテーマは『継往開来〜繋ごう未来へ〜』だ。その意図するところは、先人の遺志を受け継ぎ未来を切り開く、過去のものを継続し発展させながら将来を開拓していくこと、古川淳大当番幹事長、五味春彦事務局長をはじめとする昭和60年卒幹事らの思いの具現化である。東京同窓会が継往開来に向かう契機となり、有意義な活動を続けていく組織となるよう祈念する次第である。



## 御挨拶

甲府第一高等学校  
校長 飯島 清樹

甲府中学・甲府第一高等学校東京同窓会が、当番幹事の皆様と役員の方々の御尽力により盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。同窓生の皆様には、日頃より母校甲府一高の教育活動に対し御理解と御支援・御協力を賜り、衷心より感謝申し上げます。

最近の母校の状況をご紹介させていただきます、部活動では県高校総体で男子八位女子十位と健闘し、インターハイに空手・アーチェリー・水泳が、関東大会には陸上・弓道・空手・アーチェリー・山岳・水泳が出場しました。文化部では県下最多の6部門（弦楽・美術工芸・写真・新聞・文芸・アカペラ）で全国高校総合文化祭に出場することになっています。進学では、昨年度の国公立大合格者一〇二名、私立大合格者三七二名と健闘し、近年安定した実績を残しております。また昨年度より文科省より「ワールドワイドラーニン

「グコンソーシアム構築支援事業」の拠点校に指定され、よりグローバルな視点での教育活動・探究活動を展開しているところです。

伝統の強行遠足につきましては、昨年度、男子は小諸までの104kmのコースで実施しましたが、女子は雨天のために途中の野辺山で打ち切りになってしまいました。雨が降りしきる中、総勢300人の同窓生が夜を徹して協力くださり、自らの限界に挑んでいる生徒たちを力強く後押ししてくださりました。

生徒たちは一高生らしく、大きな夢を持ち、日々自らを成長させ、社会の中で自らの使命を果たせる人材になるべく、何事にも前向きに全力で取り組んでいます。私たち教職員も力を合わせて生徒たちの背中を押していきたいと思えます。

同窓生の皆様におかれましては、今後とも引き続き甲府第一高校の教育活動に対しお力添えくださいますようお願いいたします。結びに東京同窓会の益々の御発展と、同窓生の皆様の御健勝を祈念し、御挨拶とさせていただきます。



## ご挨拶

東京同窓会 令和六年度  
幹事長 古川 淳大

物事を測る尺度は人それぞれ。例えば今の自分、仕事をフルマラソンで30kmか40kmか？ よくある考え方ですが、我が甲府一高生は多分 最高地点の野辺山か 白田か 小海？小諸には辿り着けるのか？ と考える事が往々にしてあるかと思えます。

少なくとも私はこれまでの人生で幾多の困難に遭遇した際に何度かそのよ

うに考えていました。

今年、学年幹事を仲間と共に努めさせていただき、先輩達の激励、指導を賜り、仲間と励ましあい足がつりながら。スマートなゴールではないと思いますが、なんとか、ようやく第64回甲府中学・甲府一高東京同窓会 という「小諸」に到着することが出来ました。

皆様方に深く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

今年のテーマは「継往開来（繋こう未来へ）」です。

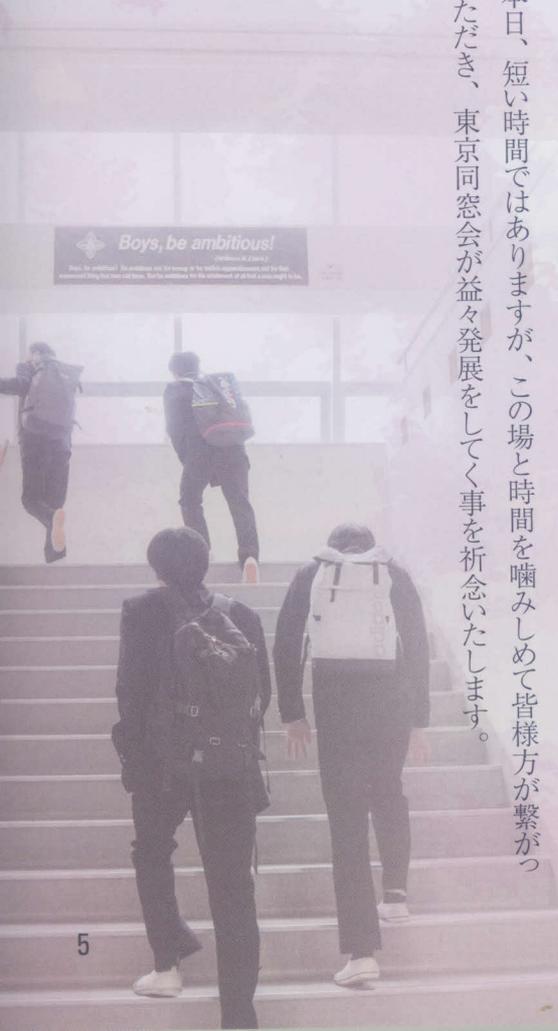
「継往開来」という言葉の意味は、先人の業を受け継ぎ、未来を切り開く。過去のものを継続し、それを発展させながら将来を開拓していくこと。

正にこの東京同窓会にマッチングしていると思えました。

また、コロナという見えない敵と戦い生き抜いた私達、しかし残念ながら敵に敗れこの世を去った同窓生もおります。 コロナ禍明け、リアル同窓会は今年で三回目となります。

改めて母校の歴史、諸先輩達から引き継いだ伝統をかみしめ、後輩達に繋いでいかなければという思いからこのテーマといたしました。

本日、短い時間ではありますが、この場と時間を噛みしめて皆様方が繋がっていたいただき、東京同窓会が益々発展をしていく事を祈念いたします。



一 高  
風 景



校是碑



校章と賛天地之化育のプレート



現在の正門プレート



正門より校舎正面



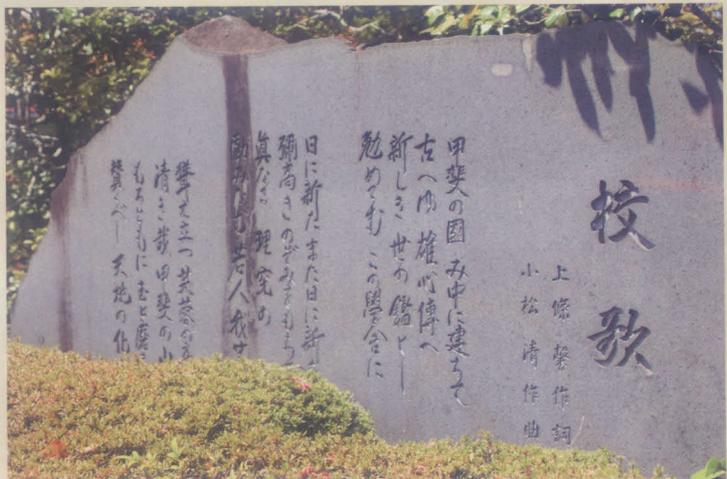
アトリウム



校章



日新鐘



校歌碑

# 応援団

令和の応援練習

不在？

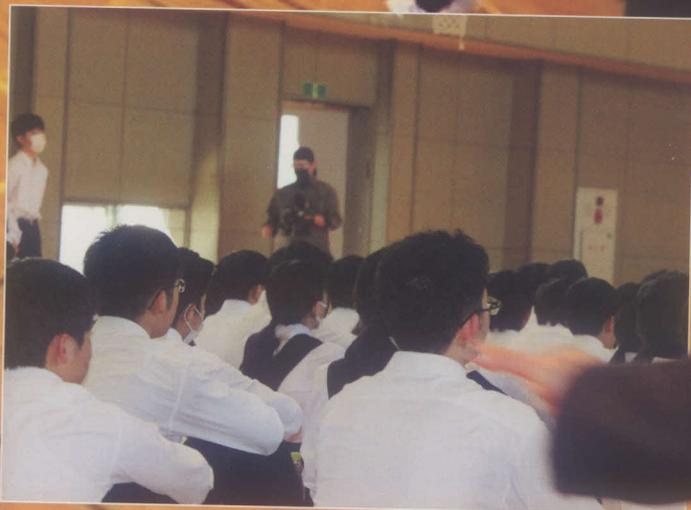
一高の新一年生は必ずその洗礼を受ける応援練習。

私たちのDNAに最初に刻まれた一高魂は、  
きつと応援練習だ。

時代は令和に変わり、

それと共に徐々に指導の方法も

変わってきているだろうとの想像はできる。



応援団のいない応援練習。

何だそれは？

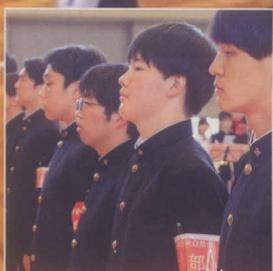
応援団がいなくて応援練習が出来るのか？

という疑問と、大げさではあるが、

伝統が崩壊してしまうのでは？

という心配を胸に

我々取材チーム四人は母校へ赴いた。



# 応援練習の練習をする

応援団が不在であるというショッキングな情報は今年1月、取材申し込みと東京同窓会記念誌の寄稿依頼のため訪問した際に安達徹前学校長からお聞きした。

応援団が不在のため生徒会が中心となり、新入生の応援練習を行うのだと。しかも「たった一日」。



私達昭和60年卒の時代は、窓を暗幕で覆い暗くした体育館で「応援団入場!!」の発声後、鉄扉を蹴りつけ「バーン!!」という激しい音を立てながら応援団が入場し、威風堂々とステージに上がり、校歌、応援歌の切れのいい演舞を披露していただき、その姿に感動し、その後校歌、応援歌練習。歌っていると応援団の先輩が目の前に現れ、「校歌二番 歌え!!」と怒鳴られ、歌えないと腕立て伏せ30回!!等の指導を受け、冷たい体育館の床に正座をしたまま頭上で手を叩きながら「わっしょい」をひたすら約一時間。腕が下がると容赦のない罵声を浴びせられ、また腕立て伏せの指導を受け……。なんとも言い難い辛い事を三日間、言葉にしてよいか悩むが、「やらされた。」応援練習後には、決して公には言えない情熱的な指導も……。

その辛い体験のおかげ?で今も校歌・応援歌は歌える。それが何の役に立つかは人それぞれの判断であるが、高校生だった頃を思い出せる瞬間ではある。

昔はなあ。俺たちの時はなあ。というワー





実際の「応援練習の様子」が動画で、  
ご覧になれます

- ①スマホから『COCOAR(無料)』を検索・インストールします。
- ②『COCOAR』を起動し、上記写真をスキャンすると動画がスタートします。

ドは禁句ではあるとわかってはいるが、心  
 中でつぶやいてしまっていた。  
 4月4日、応援練習の練習日。不安、期待、  
 余計な心配をしつつ、先輩面をして母校へ。  
 太鼓の音と校歌が聞こえた。おや？応援  
 団のOBが指導しているのか？流石だ。音  
 が聞こえている校舎西側へ足を運ぶ。そこ  
 には在校生約50人が歌っていた。彼等の前  
 には舞っている生徒。ん？生徒だ。応援団  
 のOBではない？一高のジャッシー（甲州  
 地方の言い方）姿なので生徒だと理解した。  
 袴姿ではないので迫力は感じられなかった  
 が、若いからか切れはある。一人の生徒が  
 近づいてきて、「本日はお願いします。今日  
 のスケジュールは4月12日の応援練習本番  
 に向けての通し練習を行います。」と、ハッ  
 キリとした口調で説明してくれた。聞くと  
 生徒会長の大森君だった。生徒会長が応援  
 団長だった！なるほど彼ならそれっぽい。  
 続いて4月12日に新入生への応援練習本  
 番に向けて応援団吹奏楽部との通し練習。  
 掛け声と音の出だしについての細かい調整  
 をしながら。  
 「突撃一高」の練習では、卒業から約40年  
 が経過した我々の身体もついつい反応して  
 しまった。邪魔にならないよう、列の片隅  
 で少しでも練習に参加させてもらった。久  
 しぶりのなんとも言えない清々しい気持ち  
 になった。

通し練習後、

彼等に話を聞く時間を

設けさせてもらった。

Q 応援団がいなくなったのはいつ？

応援団は三年前に一人となり、二年前から不在となり、その後生徒会が中心となり、応援委員として活動している。

Q 校歌・応援歌の演舞はどのようにして覚える？

応援の演舞は、応援団の先輩方やユーチューブ等で覚える。——時代を感じる…。

Q 活動状況は？

活動は年に6回程、県総体、インターハイの壮行会、野球県大会等々。

Q 応援練習がたった一日だけなのは短いと思うけど？

応援練習の「厳しさ」について、二年前までは二日間の予定であったが、コロナの影響により、一日に短縮されてしまい、二日目の厳しい練習がなくなってしまった。その後は一日だけの実施となり、厳しさは薄れているいるが、それ（厳しさ）の部分も必要であると考えている。

Q 新生は一日の応援練習で歌詞を覚える事が出来る？

入学説明時に新生にはCDを配布し、当日までに覚えるように指導している。

Q 今でも「応援練習を乗り越えて初めて一高生になる」というフレーズは使っている？

はい。そのフレーズは今も引き継がれています。

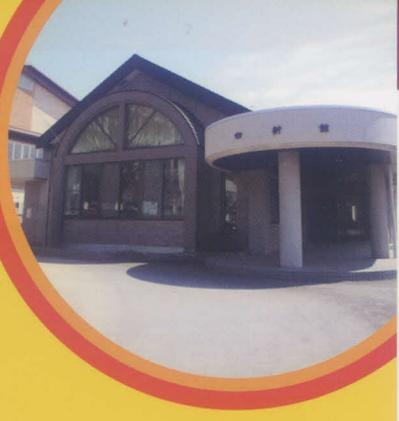
Q 「鶴城に」「お御崎さん」が無くなっているが？

時代とともに無くなっていった。しかし、特に「鶴城に」は自分達の代で復活させたいとは思っていません。



取材中に「厳しさ、一体感は繋げていきたい。」と力強い言葉も聞けた。我々の不安は一蹴された気がした。





# 日新館で食べてみた!

応援練習の取材に訪れた4月12日、我々には密かな企みがあった。

「日新ホールで昼食を食べる。」  
今や建屋も名称も変わって、日新館、となっている事は承知しているのだが、どうしても、日新ホール、と口に出してしまうのは、遠い昭和に卒業した我々では仕方がない。

さて、卒業生でも日新館で食べられるのか？  
事務室で恐る恐る訊いてみた。

「昼休みの時間になると生徒が一言に来ちゃうから、早いうちにどうぞー午前11時から空いてますので。」  
食べて良いか悪いかは明確にお答え頂けなかったのだが、いともあっさり案内してくれたので、素直に食べさせていたいただく事に。(本当はいけない事なのだとしたら、ごめんなさい。)

かつて日新ホールがあった場所とは違い、現在は構内の南東角に位置する日新館。  
午前11時を待って、いざ入館。  
明るい館内に整然と並んだテーブル。  
入り口脇で売っていたプラスチック札は、券売機で購入する食券に変わっていた。

我々の時代には無かったメニューが沢山ある。  
ご飯類は事前に注文を受けた後の数量制だとの事で、麺類しか残っていないかったが、  
「懐かしいー高の学食だー」  
それだけでテンションが上がる。  
私は天ぷらうどん、同行の同期生はラーメンを注文。  
一高の学食の味を約40年ぶりに堪能させて頂いた。

我々が在学時のメニューは、ラーメン・カレー・特カレー・チキンライス・定食(日替わり)がラインナップだったと思う。

教職員には裏メニューがあったっぽい。  
某先生がカレーうどんを食べている光景は妙に覚えている。  
チキンライスは人気で結構な競争率も高く、昼休み時は売り切れていることが多かった。  
2時限(2校時?)目が終わって早弁、3時限目が終わってダッシュで日新ホール、昼休みは前店か横店でカップ麺とうまい棒とチエリオ...。  
そんな記憶を蘇らせつつ、天ぷらうどんをあっという間に完食してしまっただ。(ご馳走様でした。)  
食後にコーヒーとお菓子をこ馳走になったのだが、それは多分「卒業生待遇」だったのだろう。(ありがとうございます)



東京では見られない「煮かつ」の文字が嬉しい



今回注文をした天ぷらうどん(¥370)

思いのほか以上にメニューが豊富!

# 大先輩の銅像を訪ねてみました

今も昔も東京のシンボル「東京タワー」と、東京の地下を網の目のごとく張り巡らされ路線が整備されている「東京メトロ」。

どちらも、甲府一高（甲府中学）を卒業された大先輩が関わっているのは、一高卒業生なら誰もが知るところ。

ということで、東京タワーの設計者内藤多仲氏と、東京メトロの前身である東京地下鉄道の創立者早川徳次氏の銅像を訪ねてみました。

内藤多仲氏の銅像は、東京都内では多磨霊園内にある同氏の墓所にあることは知られていますが、公園墓所とは言え個人の敷地内に足を踏み入れる事にもなりかねないので、この企画では遠慮しました。

南アルプス市立榊形中学校にご協力を頂き、榊形中学校校内にある銅像を紹介します。

銅像は正門を入ったすぐ右手に、同氏が設計した体育館（現在は新体育館に建て替えられています）を見つめるように銅像は立っています。またすぐ近くの榊形北小学校の校内には、同氏の言葉が石碑として立っています。



内藤多仲氏の銅像（協力：榊形中学校）



榊形北小構内の石碑（協力：榊形北小学校）



早川徳次氏の銅像

早川徳次氏の銅像は、東京のご真ん中銀座にあります。

東京メトロ銀座駅のコンコース内、いわゆる銀座の地下通路なのですが意外とわかりにくいかもしれません。

目立った案内板等も無いので、B7出入口とB8出入口の間をよく探してみてください。

ロンドンの地下鉄を日本の首都に…と東京の地下鉄事業化を画策、東京地下鉄道創立当時は常務取締役就任されていたそうですが、後に第4代社長として手腕を振るわれたそうです。

職員教育や福利厚生にも力を入れていた早川氏が開設した研修施設「聖智寮」や、開業当時の東京地下鉄道上野駅は、内藤多仲氏が設計をしたという記録も残っています。

この他にも、関東近郊には大先輩の銅像が何ヶ所かありますので、インターネット等で検索して大先輩を訪ねてみては如何でしょうか。

早川徳次氏の銅像

内藤多仲氏の銅像  
（協力：榊形中学校）

下記QRコードにリンクしたAR動画には、ここで紹介し切れていない情報もご覧いただけます。そちらもご覧ください。

※動画閲覧にはCOCOAR(無料アプリ)が必要になります。

## 内藤多仲氏銅像のアクセス

南アルプス市立榊形中学校構内  
住所：南アルプス市小笠原 985  
電話：055-282-0056

※中学校構内のため、見学の際は職員室に一声掛けてからお願いします。



## 早川徳次氏銅像のアクセス

東京メトロ銀座線・丸ノ内線・日比谷線「銀座駅」地下コンコース B7・B8 出入口付近



## 「日新鐘」に寄せて

一紅会会長  
峯川 文江

去る3月9日(土)「第25回一紅会主催 春の講演会」を開催致しました。

節目となる第25回講演会を、5年振りにアルカディア市ヶ谷において、以前のような形式で開催できましたことは、大変嬉しく感無量の想いがありました。

前日の朝は雪、当日は陽射しこそありましたが冷たい北風、参加される方の足音がとても心配でした。受付開始前から「お久し振りー」と、笑顔で来場される方々の姿に、胸をなでおろしました。

講演会では、講師大久保好男氏が新聞記者として見てきた政治取材のエピソードやテレビ会社の経営者としての体験やメディアの意義などを話してくださいました。穏やかな語り口の中にジョークや裏話を交えて、実に楽しく内容豊かな講演会でした。あつという間の1時間半でした。

そして5年振りの懇親会では、講師を囲みながら、先輩や後輩が交わり語り合う、笑顔溢れる何とも和やかな雰囲気でした。学年の枠を超えて繋がる同窓会の素晴らしさを実感しました。

今年の懇親会は、以前と変わった事が一つございまして。9月・11月の幹事会で「アルコールより料理に重点を」と、学年幹事から強い要望が出され、今回はアルコールの種類も量も大幅に控えました。大改革をしたつもりです。帰り際に、「いい講演会でしたよー」との声かけを頂き、準備してきたプロジェクトメンバーや当番幹事は、疲れが吹き飛ぶ思いでした。

一紅会の世代交代の必要性も感じています。平成8年の一紅会設立以来、先輩方より受け継がれてきた良き伝統を大切にしつつ、活動しやすい一紅会を目指して、若い世代に引き継いでいく所存です。

同窓の皆さまの一紅会へのご協力に感謝しつつ、これからも温かいご支援をどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



## 第二回 あおぞら共和国感謝の集い レポート

2023年 11月 18日 山梨県北杜市白州 甲斐駒ヶ岳の麓にあるあおぞら共和国にて

『あおぞら共和国感謝の集い』に参加してきました。八ヶ岳は、出発前に都内で感じていた空気よりもひんやりと冷たく、初雪で山頂付近が白く薄化粧されていました。

2019年以降コロナ禍で開催できなかったため、今回が二回目。62名の参加者が集まり、総会、あおぞら会のあゆみ紹介、甲府一高ア・カペラ部の合唱、集合写真撮影、懇親会、施設の見学と高原の冷たいが穏やかな空気の中、ゆったりとした時間を過ごしてきました。

あおぞら共和国は難病あるいは障害のある子どもたちが家族と共に過ごすレスパイト(休息、息抜き)施設。建設は2011年に始まり、現在はほぼ完成しており、全てが寄付によって賄われています。

活動もチャリティーウォークや草刈りボランティア、サマーキャンプ、アーティスト交流などイベントや交流が行われています。

甲府一高あおぞら会はあおぞら共和国を支援するために2014年に同窓生の有志によって結成されています。現在は400人を超える会員がいます。周囲には、高い山々、森に囲まれていて広大な空を感じることができる。季節ごとの自然の移り変わりや、

青く透き通った空、満天の星空も見ることが出来る。

草が綺麗に刈られた広場を中心に、交流棟、宿泊棟が5棟、入浴棟、子どもの遊び小屋(キッズボックス)、屋外ステージが構成されている。伸び伸びと自然を感じさせてくれる場所。

建物は、木の温もりや自然素材を使った温かみのあふる木造の建物。周囲の自然環境に配慮した建物。

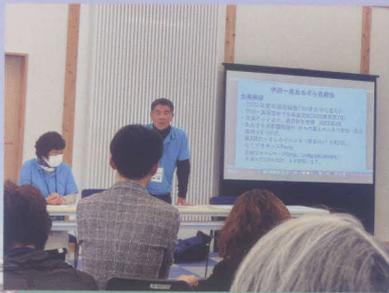
子どもたちや家族にとって、時間も忘れて過ごすことができるだろう。

この場にいると、その家族との幸せな時間を想像できるくらい素晴らしい場所でした。

実行委員長の小口弘毅さんの寄稿文に

『医療の必要な子どもたちにとって、あおぞら共和国は生きる喜びを感じる特別な場所』とあり、まさにその通りだと実感しました。

あおぞら共和国の取り組みに共感し、支援を続けていく姿勢が示されたこの集いは、医療の必要な子どもたちやご家族、さらには地域の絆を深め、子どもたちへの未来への希望を感じさせるものでした。



「甲府一高あおぞら会」WEBサイト  
<https://ymkp.net/aozora/>



## 第二五回 甲府一高湘南同窓会 出席レポート

山梨で生まれ育った少年が海への憧れを抱くようなそんな気持ちでの『湘南同窓会』への参加です。会場はホテルのチャペルに隣接した、ステンドグラスが内装に組み込まれた気品のある会場。

令和6年4月13日に藤沢市・湘南鎌倉クリスタルホテルにて開催された第25回甲府一高湘南同窓会には、27名の参加者が集まり、様々な世代が交じり合った活気に満ちた賑やかな雰囲気となりました。

冒頭、丹沢富雄会長の挨拶の中で、甲府一高湘南同窓会の理念は、『ふれあい、語り合い』であると語られておりました。この理念は、卒業生同士がお互いに触れ合い、交流を深め、そして思い出や経験を語り合うことを大切にしています。湘南同窓会は、古き良き思い出を振り返りながら、新たな友情を育み、未来への希望を共有する場として活動しています。ふれあいと語り合いを通じて、絆を深め、共に成長し続けることを目指しているとのことでした。

まさに今年度の東京同窓会のテーマ『継往開来〜繋ごう未来へ』に通づるようなお話でした。東京同窓会の清水昭会長も会に駆けつけておられました。我々、東京同窓会当番幹事からの挨拶の場ををいただき、今年度の同窓会への意気込みをみなさまにお伝えできたことがありがたかつ

たです。

昭和32年卒の先輩方、昭和62年卒の後輩も参加し、先輩と後輩が共に思い出やビジネス、それぞれの活動などを語り合う場面が多く見られました。食事しながらの和やかな懇談では、学生時代の思い出や現在の近況について熱心に話し合っていました。世代を超えた和やかで活気ある素晴らしい会でした。

横澤良次さんによるフルートとピアノの演奏が披露され、会を二層華やかに彩りました。音楽が好きなみなさん、熱心に聞き入っていました。

『湘南同窓会』は平成9年に発足し、会員の皆さんでアウトドアや鎌倉散歩などの活動をされているとのこと。また、若い方々や湘南地域に限らず多くの方に来ていただきたいとの願いがあるようです。

湘南同窓会の理念である『ふれあい、語り合い』が、この会を通じて強く感じられました。卒業後も時を経て変わらぬ絆が繋がっていることを実感しました。同窓会は、卒業生同士の交流の場としてだけでなく、地域や社会とのつながりを深める場でもあります。これからも、この絆を大切に、相互の支え合いと成長を促進していく会が『湘南同窓会』なのだ確信した1日でした。



「甲府一高湘南同窓会」WEBサイト  
<http://ichikoshonan.livedoor.blog/>

# 寄稿

昭和60年卒 同窓生

## 故郷と共に生きるために

— 未来へつなぐ先人からのメッセージ —



秋山 尚之「3年2組」

地質調査会社 アース・リサーチ有限公司 専務取締役  
(技術士 応用理学)

らく村内を流れる相川に由来していると考えられるが、同様の地名は貢川や二川(笛吹川と荒川の合流点付近)などにもみられる。なお、相川村に鎮座していた御崎神社が、その後の美咲町の名前の由来となっていることは想像に遠くない。

地名とは、その土地が表す地形や気候などの風土のほかに、日本人の歴史とも密接に関係している。日本人は、約23万年前にナウマン象を追って大陸から渡ってきた人々に由来する。彼らの生活の場(環

境)が、そのまま地名として残されており、そことはアイヌ民族の移動と共にその土地に付けられた呼び名とも密接に関係している。

例えば、隣接県にある諏訪湖の「諏訪」という地名は、アイヌ語で「すつ・ない・わ」に語源をもつ。これは、「山麓の川を渡渉する場所」を意味するものであるが、恐らく諏訪湖を越えるのに湖に流入する河川を横断していたことを意味すると考えられよう。その後、語頭と語尾に当字をし、真ん中の「つ」と「ない」が省略されて「諏訪」となったとされている。諏訪周辺の岡谷や伊那なども、アイヌ語の地形を表す言葉に語源があるとされている。ちなみに、山梨県と静岡県の県境にある富士山の名前の由来についても、アイヌ語の「フンチヌプリ(火を噴く山)」から来ているのではないかとの説もあるが、このことについては定かではない。

### ■地名が語るもの

地名には、様々な意味や由来があることはすでにお気付きであろうが、地名にはメッセージ性の高いものもある。例えば、平成26年(2014年)8月に発生した広島県安佐南区の土石流災害現場の住居表示は、「広島市安佐南区八木」であるが、「広島市安佐南区八木字蛇落地(じゃらくち)」と言う小字名があったのである。「蛇」や「梅」が地名に残る場所は、元来、土砂災害の多い場所を表すことが多い。同地区の避難場所であった「梅林小学校」も土砂災害を連想させる名称である。場所は変わるが、お隣の静岡県葵区にある名湯梅ヶ島温泉も元々は「埋ヶ島」ではないかという説もある。梅ヶ島地区は、背後に「日本三大崩れ」の一つである「大谷崩れ」があり、ここからもたらされた大量の土砂が集落を埋めたことの名残が地名に残っている場所の例とも考えることができる。

山の崩壊(地すべり)を表す言葉には、飛山とびやま、青抜おうぬけ、蛇崩じゃくずれ、水窪みずくぼ、押田おしだ、猿されなどがある。谷(タリ)や棚(タナ)、垂水(タルミ)なども「深山の断崖状の地形や滝」などを表す地名であり、いずれも山体崩壊や土石流の発生を示唆するものである。

小川豊著「危ない地名災害地名ハンドブック(三一書房)」によれば、石川県珠洲市の地名に用いられている「洲(ス)」とは、その名のとおり水が大いに関係した土地柄を示している。各地にある中洲や豊洲、大洲などは、河口付近に形成された肥沃な場所を指す地名として知られている。その反面、「スズ」には方言としての「急傾斜地」とか「水分豊富な土地」の意味もあり、能登半島地震で珠洲市に液化被害が大きかったことと調和的である。

そもそも、能登半島の形成は、約3000万年前からはじまる日本海の拡大と日本列島の形成に大きく関係している。約3000万年前にユーラシア大陸の東縁の一部であった日本列島は、地下深部からのマグマの上昇によって、大陸から引き離された。その後もマグマの上昇は継続したため、引き離された地殻はさらに東へ移動、隆起し現在の日本列島を形成した。大陸と日本列島との間の日本海は、約600万年前あたりから短縮し、現在の日本海と日本列島の形状になった。ただし、一部の断層活動はその後も継続しており、2007年に発生した能登半島地震の震源とも関連しているとされている。

話を元に戻すと、甲府盆地には多くの大小河川が流入している。主なものは、盆地東部の笛吹川や日川、西の釜無川や御勅使川などが挙げられる。日川や笛吹川流域の地名に勝沼がある。溝手理太郎著「市町村名語源辞典(東京堂出版)」によれば、「カツ」は崩壊地形や崖地形を意味し、「ヌマ」はその

名のとおり沼地を意味するので、勝沼は崖下の沼地や湿地の意味がありそうである。実際の地形は、日川がもたらす土砂によって形成された扇状地形が西方に向けて扇を広げており、その中を日川が西流している。周辺には、葡萄畑やワイナリーなどが散見され、甲州ワインの一大産地となっている。この地を支配していた甲斐武田氏家臣である勝沼氏の名をも、この地名に由来しているのかも知れない。

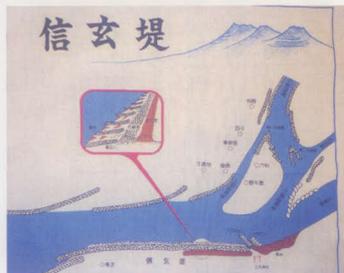
なお、扇状地形の特徴として、扇頂部（つまり、山間を流れてきた河川が開けた土地に出た場所であり、扇で言うところの付け根の部分にあたる箇所）には、比較的大きな直径の巨岩や岩塊などがたまりやすいとされている。これとは反対に、扇端部（扇頂部の逆の箇所、扇で言うところの風をおおる部分）には、湧水箇所やため池などが多い。また、細かな粒子の粘土地盤が堆積する傾向もあるため、湿地が形成されている状況もある。この光景を思い浮かべると、先ほどの「カツヌマ」の地名がもつ意味と調和しそである。

一方、御勅使川や釜無川が流下する甲斐市（旧竜王町）あたりは、古来より多くの水害が発生する場所でもあった。御勅使川や釜無川の名称については、諸説あるが水にまつわる言葉が起源となっているようである（例えば、御勅使川は大水の出る河川の意味から「水出川（みだいがわ）」、釜無川は、釜（淵）ができない（無い）ほど直線的な流向をもつ川）。また、これらの河川が合流する甲斐市竜王（旧竜王町）についても、竜（淵）を思わせる字が用いられている。

このように、甲府盆地をとりまく地名をみると、古来より河川の氾濫や大水に悩まされていたことが示唆される。

### ■歴史にみる防災施設

県内には、郷土山梨を水害から守るべく多くの砂防施設が建造されてきた。主なものは、甲府盆地東方の日川に施工された砂防施設や、西方にある御勅使川の堤防施設などである。特に、御勅使川の洪水対策工事は古く、戦国武将の武田信玄の命により築堤された「信玄堤」は、特に有名な堤防施設である。



信玄堤の写真

日川にも多くの砂防施設が施工されている。その中でも大正6年築造の砂防堰堤は、土木建造物としては初期のもので、当時は高価であったコンクリート構造物として、登録有形文化財や土木学会選奨の土木遺産などの登録を受けている。この砂防施設



土木遺産であるコンクリート製の砂防堰堤



堰堤を説明する案内板

は、竣工から107年経った現在でもその機能を有しており、多くの土砂を捕捉し渓岸の安定化に貢献している。

これらの砂防施設は、いずれも土石流や氾濫などの水害から住家や畑を守り、住民生活の安定化を図るために建造されたものである。

■災害を乗り越え、郷土を未来に託す災害は繰り返される・・・自然と共に生きていく人類は、そこから多くの恩恵を賜っている。しかしながら、自然の厳しさも数多く経験してきた。

2024年1月1日、能登半島を震源とするマグニチュード7.6の巨大地震が発生したが、同様の震源域を有する地震は、2007年にも発生している。能登半島地震に限らず、2018年の北海道胆振地方地震、2016年の熊本地震、2011年の東日本大震災など多くの震災に見舞われている。

我が国は、地震大国と呼ばれるように地震の発生頻度は高い。すべての地震がプレート沈み込みによって発生している訳ではないが、本邦が大陸のプレートと海洋プレートが互いにぶつかり合い沈み込む場所に位置することが、頻発する巨大地震や津波の発生源となっていることは事実である。

地震が発生するたびに、家屋の倒壊、道路斜面の崩壊や液状化によるインフラ被害などが発生し、多くの被災者や帰宅困難者を出してきている。

地震と同様に、ほぼ毎年のように襲来する台風などの水災害も、我が国特有の自然災害の一つである。近年は、「ゲリラ豪雨」や「線状降水帯」などの異常降雨などによる急激な河川水位の上昇、土石流の影響などで多くの水災害が発生している。

地震や津波、台風などの自然災害を直接抑止することは到底できないことである。しかしながら、これらの被害を最小限に抑えることはできそうであ

る。先人たちは、危険を促す地名や地形に多くのヒントを見出し、防災・減災のための施設を築いてきた。それらは、今でも我々の生活を災害から守るに欠かせない施設として現存し、その機能を発揮している。そのバトンは、いま我々の手に渡された。今度は、我々が美しい郷土を未来に残すのである。

## 継往開来

### 人との出会いが人をつくる



井上 貴美(旧姓 小宮山)  
〔3年2組〕  
医療法人慈光会 甲府城南病院  
看護師 副看護部長

今までの人生の中で、たくさんの人との出会いと別れを繰り返してきた。それはどんな人も同じであろう。そしてその中に自分のキーパーソンとなる人との出会いや、影響を受けた言葉との出会いもあるであろう。私の人生は本当に普通の人生ではあるが、「普通」にさせていた「人」と「言葉」に感謝し、「人との出会いが人をつくる」ことをお伝えする。

小学校の時に「保健委員」という役目をしていた。小学生の時から「将来は看護師になる」という希望があったこともあり、6年生の時には「保健委員長」も経験した。ある日、体温計(今では考えられない水銀体温計)が入ったガラスの瓶を床に落として割ってしまった。私は「怒られる」と思い、ビクビクしながら片付けて、先生に「すみませんでした」と小さな声で謝った。先生は「形あるものは壊れる

のよ。大丈夫」と伝えてくださった。怒られるとばかり思っていたので、その言葉に驚き涙が止まらなかつた。もう一つ保健委員長の仕事には、持ち物検査があった。ある日の検査でかなり結果が悪かったため、担任の先生に報告すると先生は「この結果をどう考えるんだ。どうしたらよいと思うか。」と私に問われた。私は「もってこない人が悪い」と返答した。そしたら先生は「それが保健委員長の言う言葉か。改善するためにどうすれば良いのか考えることが仕事だろう」と怒りだし、持っていた色鉛筆がへし折れるくらい机にたたきつけた。これらの保健委員長としての経験は11歳の私に強烈なメッセージとなり、今も私の中に息づいている。

私の座右の銘は「先んずれば人を制す」である。この言葉は小学校を卒業する時に、校長先生が卒業生全員に下さった色紙に書かれていた言葉である。色紙には様々な言葉が書かれていたので、この言葉が私の手元に来たのは偶然であった。由来は「史記・項羽本紀」の中に「先即制人 後則爲人所制」とあり、意味は「人より先に事を行えば、相手も押さえつけることができ、勝つことができる」というものである。私はこの言葉の意味を調べたことがなかったが、自分なりに解釈し、「相手」をおさえつけるのではなく「自分」に勝つこと、「自分」をコントロールするために全てにおいて早めに着手する」という考えをもちながら人生を歩んできた。恐らく、忙しくなるとやるのが雑になり、疎かになる自分のために送られた言葉であろうと勝手に解釈し今も実践している。

高校は偶然一高に決まり、入学前から校歌や応援歌を覚えるという難行が待っていた。聞いたことも歌ったこともないものを楽譜だけで覚えるとは本当に不安しかなかった。応援練習は恐ろしすぎ

て、過換気を起こしてしまうほどであり、強行遠足という修行では、50キロ近く歩く女子はまだしも、100キロ以上走る男子の苦行は、本当にインパクトがあった。喘息があった私は強行遠足に参加することができなかったが、3年間ずっと担任であった山本紘治先生に、3年生のときに「参加したい」とお伝えしたところ「やってみろ」と背中を押してくれた。ゴールしたときに溢れた涙の熱さは今でも忘れられない。進路についても山本先生からはたくさんアドバイスをいただいた。看護師になるという夢にゆらぎはなかったが、学校の選択にはかなりゆらいだ。山本先生は看護系の大学を勧めてくださったが、臨床にでるまで1年早くなるという理由で看護系の専門学校を選択した。この選択は悪くはなかったが、素直に先生が提示して下さった大学進学をすれば良かったなと後悔することになる。専門学校での思考に限界を感じて、後々大学院に進学をしたからである。自分の考えも大切であるが、私のことを知ってくれている人が提案し示唆して下さることを「あるがままに素直に」受け入れることも時に大切で自分の今後に影響を与えることだとわかった。

そして看護師として働き出して2年目に、私の人生を変えるような患者さんとの出会いがあった。その患者さんは肝臓がんを患い、手術や抗がん剤・放射線など様々な治療を行ったがなかなか病状は改善しなかつた。看護師になりまもない私にはなすすべもなく、気持ちに寄せることができなかった。その当時は医療用麻薬が日本に入らなかつた。患者さんの痛みの緩和はかなり不十分であった。痛みによる苦しみが強く、患者さんの人間性が失われていくことを目の当たりにし、私自身も何もできない看護師という仕事が辛くなってしまう。そしてそ

の時の師長に「仕事を辞めたい」と伝えた。「それなら一緒に食事に行きましょう」と誘ってくださり、東京の某有名ホテルでかなり高価な天ぷらをご馳走してくださった。その時に「あなたの辛さはわかる。でもまだ何にもしていないのではないかしら」と言われた。その言葉で自分が患者さんのために知識や技術を学び、患者さんの苦痛緩和のためにもっとすべきことがあったことに気が付いた。その後は自分の看護師人生のテーマに「がん看護」を掲げて歩み出すことができた。そしてこの師長のように、部下や後輩が悩み立ち止まっているときに、一緒に食事をしながら、「本人が気付いていないことを静かに示唆できるような人になること」を大きな目標にすることができた。

看護師になり18年後に「緩和ケア認定看護師」という資格を取得した。「緩和ケア」というのは、病気からおこる人の体や心のつらさ、経済や社会生活の不安定さ、自分の人生への問いや苦悩・後悔など様々なことを緩和するために、患者・家族そして医療者同士などで一緒に考えたり工夫したりするケアである。以前は「がん」は不治の病であり、多くの患者さんは自分の病名も知らされず、辛い症状に悩まされながら亡くなっていった。生命科学の発展とともにがん治療は多様になり、苦痛の緩和もかなりできるようになってきた。そして緩和ケアが「がん」にとどまらず、神経難病や脳血管障害、そして認知症や高齢者に対しても非常に必要なケアであることが示されるようになった。緩和ケアの5本柱として①苦痛の緩和②コミュニケーション③家族ケア④日常生活支援⑤チームアプローチがあると言われている。関わる患者さん・ご家族、そしてスタッフ全てに「緩和的に関わる」ことが必要であると考えるようになった。「その人が大切にしている

ことは何か」、「どこに価値をおいているのか」、「これからどうしたいと思っているのか」などその人の考えや意向に重きをおいて関わるのが私の価値となっていた。今でも緩和ケアチーム活動が仕事の一部としてできるのは、今までの人生において出会ったことができた人や言葉のおかげであると確信している。

これらの経験がなければ私は物事を一方向にしか見られず、偏った「普通」ではいられない人になっていたと思う。今の自分を作ってくれたのは周囲の人との関わりの賜物である。自分に課されていることは、「人によく関わる」ことであるとさえ、小学校の時から恩師や関わってきた方々が伝えてくださったことや言葉、また、人にとって関われればよいのかを後ろ姿で見せてくださったこと、今わからなくても後でわかるように示唆してくださったことや教えてくださったこと全てを可能な限り実践しようとしていきたいと思う。その人の心の片隅に引っかかることを願いながら。

## 高校時代を振り返って



功刀 清一「3年6組」  
山梨県立中央高等学校  
定時制 教務主任

今から42年前、1982年（昭和57年）4月から一高での高校生生活が始まりました。入学式は4月8日に行われました。私はその入学式に遅刻してしまっただけです。交通渋滞のため入学式に遅刻をしました。式の開始時間



には間に合ったのですが、当時校門を入ってすぐのところにあつた駐輪場で受付をしていて、私が学校に到着した時には受付は既に片づけられた後でした。校門のところには先生が学校に到着した私を見つめ、すぐに体育館の入口まで連れて行ってくれました。体育館では400名の近い新入生とその保護者が静かに着席している中、自分の席を探して歩いていくのはとても恥ずかしかったです。これが一高での最初の思い出です。

高校の思い出の一つに応援があります。4月14日から3日間、5校時と6校時に新入生の応援練習は行われました。当時はホームルームは昼休みにありました。ホームルーム終了のチャイムが鳴ると同時に先輩たちがガラッと勢いよく扉を開け、担任の先生がまだ話をしている教室に入ってきて、「時計と眼鏡をはずせ、靴下を脱げ、急げ」と言い放ち体育館へ移動するように促しました。高校ではこういうこともあるのかと驚きました。私たちは体育館に走るように移動し、生徒会の先輩の指示に従い整列しました。暫くすると、「応援団入場」という大きな声と同時に体育館後方の鉄のドアをける音が聞こえ、吹奏楽部の演奏する曲に合わせて応援団が入場してきました。入場曲は「誰かが口笛ふいた」という曲のようでした。後日あの曲が「フランス分列

行進曲（サンプル・エ・ミューズ連隊行進曲）」と

いう曲で、普仏戦争時の兵士の士気を高めるために書かれたポール・セザンヌの詩を用いた歌詞がついたフランス軍歌・行進曲だということを知りました。応援練習の様子ですが、初めに吹奏楽部の演奏で歌う先輩の校歌や応援歌を聞き、その次に1年生が歌います。太鼓の合図で先輩たちが1年生の前に来て「ちゃんと歌ったか、歌ってみろ」と言いますが、が1回聞いただけで覚えられるものではなく、当然歌えません。すると「腕立て10回」などと言われて数を数えながら腕立て伏せをすることになりました。全員で「一高、一高」と手を上に挙げた状態で拍手する時間も結構ありました。しっかり声をだして歌っていても「ちっこい、ちっこい」という言葉を何度も聞いたことを覚えています。校歌・応援歌や応援の形を覚えるための練習というよりは、手の上に挙げ拍手しながら大きな声を出すといった訓練のように感じた苦痛を感じた時間でした。応援練習後には多くの生徒が声を嗄らしていたことを覚えていています。この3日間があったからこそ一高生で



あるという実感を持つことができ、校歌や応援歌も覚えることができ、40年以上たった今でも校歌や応援歌の歌詞を覚えているのは応援練習のおかげかもしれません（笑）。何の因果かその後応援団に入り、1年後に逆の立場になり応援練習に参加することになるとは夢にも思ってもいません

でした。

応援団の活動とは、緑が丘スポーツ公園で行われていた山梨県総体、野球応援、一高祭最後のファイヤーストーム、応援練習などだったと思います。県総体では朝4時に学校に集合し、真っ暗な中で緑が丘公園のごみ拾いをしたこと、野球応援では足の裏がやけどするくらい熱かった黒い鉄板（応援団用の台）の上での全校生徒の前で応援したこと、強行遠足では白田のおばちゃんの家に行き仏壇に線香を手向けたこと、ファイヤーストームでは熱く大きく燃え上がった炎の前で演舞したことなど、数多くの貴重な経験をさせていただくことができました。本当に感謝しています。

高校生活や行事を通して、生徒たちが自由な発想で自ら考え、自らで行動して答えを導こうと精神は、40年前と今も変わってはいないのでしょう。

2017年の当番幹事を機に同窓会の活動にできるだけ参加しようと思うようになりました。一高に出向き、今はもうない旧校舎・西館や体育館、日新ホール、部室などを想像し、思い出を巡らせました。そうして記憶の点と点をつなげていくことが、自分のことを振り返る良い機会を与えてくれました。かつて自分がやりたくてもできなかったこと、果たせ



なかった夢などが浮かび上がります。これから60代に入り定年を迎え第二の人生で取り組むべきテーマなのかもしれません。

終わりに、2024年第64回甲府中学・甲府一高東京同窓会が盛大に開催できることを大変うれしく思います。本校は創立144年を迎え、卒業生数は今年度には3万8千人を超えます。この長期にわたり、同窓会組織の運営に力を注いでこられた歴代の会長や役員の皆様、それを支えてこられた多くの卒業生の方々に感謝を申し上げます。

新聞やニュースで一高生や卒業生の皆様の活躍を目や耳にすると、その度に自分のことのようにうれしい気持ちになります。一高生であったことに感謝するとともに、これからも継往開来を重ね、甲府中学、甲府第一高校として成長を続け、甲府一高と一高同窓会の末永い隆盛を願っています。

## 数学教育の未来



清水 宏幸「3年3組」  
山梨大学教育学部 教授

皆さんは、数学に対してどのようなイメージをもっているのでしょうか。理解するのが難しい、ちんぷんかんぷん、嫌い、どうして勉強するか分からない、などなど。数学に対してネガティブなイメージをもたれている方が多いのではないかと思います。

私は、大学卒業後から山梨県の公立中学校3校と

## 電機メーカー勤務を振り返って



出羽 隆治「3年1組」

三菱電機ビルソリューションズ株式会社  
品質保証・稲沢ビルシステム  
製作所・品質保証部・システム品質管理課・専任

昭和六〇年三月、甲府第一高等学校卒業の出羽隆治です。現在、三菱電機株式会社から三菱電機ビルソリューションズ株式会社へ出向し、愛知県稲沢市にある稲沢ビルシステム製作所・品質保証部に所属しつつ、東京都千代田区にある本社・空調冷却熱・システム品質保証部にも兼務で所属し、品質保証業務に従事しております。どうぞよろしく申し上げます。

第六十四回甲府中学・甲府一高東京同窓会は昭和六十年卒が当番幹事です。何卒よろしく申し上げます。

今、思い起こしますと私の一高時代は、(すみません、良く言う)校則というルールにとらわれない型破りな生徒で、応援団でもないのに屋上で休憩したり、一高の学食メニューが少ないからと梨大の学食に食べに出かけたりもしていました。当時は、恩師の先生方のお忙しさを理解できずにダメな生徒だったと自分でも思います。しかし、当時の一高の先生方から、私のような生徒もしっかり卒業まで面倒を見ていただけだったので、心から感謝しております。

昭和六十年に一高を卒業後、同年山梨県を離れて一年・二年は、埼玉県東大宮市。三年・四年は、東京都港区(※現在は港区から江東区に移転)にキャンパスを構えていた芝浦工業大学電子工学科に入学しました。

かし、AI隆盛の昨今、複雑な計算はテクノロジに任せることができますので、人間の強みを生かすには、問題を発見すること、どのようなデータを収集して、どのような計算式を立てて結果を導くのかといった見通し(計画)を立てること、そして実際にデータを集め処理した後に、その結果をどのように解釈して次につなげていくかを考えるといった分析・評価・改善することが重要であると言われて

います。「ロボットは東大に入れるか」というプロジェクトを行っていた新井紀子氏は、そのプロジェクトを終えるとき、「AIの弱点は、取り組んでいる問題そのものや答えの意味はまったく分かっていないことである」と述べています。これはAIが現在の延長線上で開発が進むことを前提にすると乗り越えることはできないことであるとも述べています。意味が分かっていないのですから、自分で問題を発見することや、結果を出した後、事象に戻して解釈し、次への方策を考えるとといったことは難しいこととです。すなわち、我々人間の強みは、意味が分かって考えることができることであると思います。

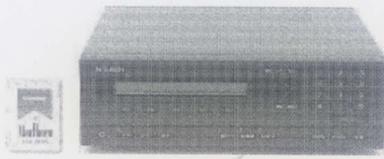
山梨大学附属中学校に20年間勤務し、数学を教えてきました。その経験を生かし、今、私が取り組んでいるのは、多くの生徒が楽しく数学を学べるよう、数学の教師を目指している学生に具体的な教材の研究や指導法について教えています。数学は、できる、できないに終始しがちで多くの生徒が正しい答えを導くために苦しく取り組んでいる様子がみられます。これから教師を目指す学生には、生徒が前向きに数学の授業に取り組み、何か面白そうだと、もっと勉強してみたいという気持ちを喚起できるようにと指導しています。中高生時代に数学に対してポジティブなイメージをもっていると、大学に入って、「文系だけど数学の科目を受講してみよう」とか、大人になって余裕ができたときに、例え数学に関する仕事に従事していなくても「自分で本を買って数学をもう一度勉強してみよう」といったように興味・関心をもってもらえることが大切であると思っています。中高生は、未来の日本、いや世界の社会を担っていく重要な人材です。我々のときのように、同級生が二百万人ほどいた(丙午(ひのえうま)世代は除く)時代とは異なり、百万人を大きく割り込み、七十万人大どになった現在に、数学が得意、できるといった人だけが数学を勉強すればよいといった考えではなく、できるだけ多くの子どもたちに数学を楽しく活動的に勉強してもらいたいと考えています。日本はこれまで数学、理科、工学といった科学技術の進展によって、国全体が繁栄してきたのですから。

これまでの数学は、速く正確に問題を解けるようになることを目指してきました。そのために、解法を覚えるくらいに数多くの問題を解き、決められた手順でより効率的に計算し、正しい答えを導くことができるようにすることを目標にしてきました。し

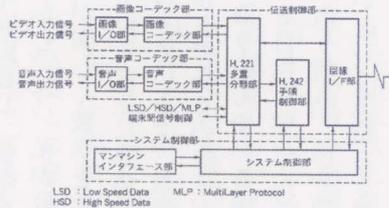
平成元年、芝浦工業大学電子工学科を卒業し、同年神奈川県川崎市高津区にある株式会社富士通ゼネラルに入社、開発部門に所属、紙面データを読み取り、アナログ電話回線網を利用して通信する一般家庭向けG3ファクシミリの開発・設計を担当しました。当時、私は神奈川県で開発・設計していましたが生産工場は兵庫県と離れており、工場の生産計画に遅れ無きよう社内ルール（設計基準）に従って設計するという新人の私には大変過酷な状況でした。しかし、この体験からルールの大切さ、設計品質の重要さを身に付けることができましたものと思います。

また、当時は、富士通グループが総力をあげておりましたパーソナルコンピュータ「エフエムタワーズ」の開発にも関わっておりました。体力には自信がありましたが、徹夜続きの日々で体調を崩してしまい、平成三年に退職しました。

同年、私は体調が回復しましたので三菱電機株式会社へ入社しました。福島県郡山市にある郡山製作所・開発部門に所属し、カメラで撮影した画像及びマイクで集音した音声をデジタル公衆回線や自営網の回線を利用して双方向で相手の顔を見ながら



ビデオコーデック MVC-8800の外観  
出典：三菱電機技報 1994年 Vol. 68



ビデオコーデック MVC-8800のブロック図  
出典：三菱電機技報 1994年 Vol. 68

通話できるビデオコーデック（国連の専門機関である国際電気通信連合（ITU）が平成二年に国際標準として勧告したH.261を採用した画像符号化装置）の開発・設計を担当しました。（注）現行のビデオ通話で採用されている画像符号化方式は、その後継技術として勧告されたH.264/H.265になります。

会社が変わっても通信機器に縁があるのだろうな。と感慨深いものがありました。

平成五年、ビデオコーデックの開発を完了し、平成六年、当該ビデオコーデックをコアコンポーネントとするテレビ会議のシステム設計を担当しました。NTT経由で旧郵政省よりテレビ会議システムを受注、本省向けテレビ会議システム及び各地の郵政局向けテレビ会議システムの設計を担当しました。本省と各地の郵政局を接続するだけでなく、全国の郵便局（同業他社の複数社が納入したテレビ会議システム）とも接続する当時としては、大きなプロジェクトでリーダーを経験しました。

システム設計した後は、資材部門と協調して部品を手配。部品手配後は、製造部門と協調して製造を進め、製造完了後は、品質管理部門と協調してシステム試験を実施しました。システム試験完了後は、出荷するため、輸送部門と協調して業務にあたりました。現地検査も完了してお客様



郵政省テレビ会議システム本省風景

出典：総務省ホームページ  
(<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h07/html/h07a02020703.html>)

へ引き渡しが無事に完了できて非常に嬉しかった思い出です。まさか、その後、郵政民営化になるとは当時の私は、思いもしませんでした。

平成十四年、私は国土交通省に納入する防災システムの品質管理を担当しました。防災システムとひとことで表しても幅が広いのもう少し具体的に説明します。全国にある地方整備局管内の一級河川や国道に設置された監視カメラ画像をエンコーダー（MPEG2/H.262画像符号化装置）で取り込み、出張所、事務所へ画像配信するシステムです。受注した後、システム設計担当者がお客様とシステムの詳細仕様を決定、図面を作成、部品・機器等を手配して製造、社内出荷検査及びお客様の立会検査を経て出荷します。出荷後は、現地で受け入れ検査、施工（ここで他社との工事調整が必要になります）した後、お客様の竣工検査を経てお客様に引き渡しされます。検査対象システムは電子機器及び電気機械になりますので、お客様の検査は、基本的に日本産業規格（JIS C規格）をベースとした検査基準、検査方法になり、検査基準、検査方法を監督職員へ説明のうえ、検査結果を確認いただきます。工期通りに引き渡しすることも大変でしたが、一番印象深かった業務としては、台風時の対応になります。深夜、台風上陸時に防災システムにおいて監視画像の確認ができないとの連絡が入ったので、その当日に復旧対応したことです。（調査した結果、他社設備のトラブルという落ちでしたが。）平成二二年、本社に異動、平成二十四年、稲沢製作所へ異動、令和四年、三菱電機ビルシステム事業本部と三菱電機ビルテクノサービスが経営統合して三菱電機ビルソリューションズが発足して現在に至ります。就職後、多忙な日々でしたが、好きなモノづくりの仕事に関われるだけでなく、様々な

省庁が主導した画像伝送システムのプロジェクトにも関わることが出来たので、とても充実した会社生活を過ごすことができております。

時代は令和となり、令和三年、三菱電機は、品質不適切事案を公表しました。すべての業務において実直に取り組む会社だと信じていました私自身、非常にショックでした。三菱電機のコミットメント(公約)は、「Changes for the Better」です。より良い改革を進めていくような品質不適切事案の反省を踏まえて、三菱電機グループは、品質風土、組織風土、ガバナンスの三つにおいて改革を進めております。それに加えて私は、一高の校是にあります「苟日新 日日新 又日新」(日々、新たに気持ちや考えを保ち続けて、今日の行いは昨日より、明日の行いは今日より新しく、善くなるように、たゆまず修養に心がけ努めねばならない。そのような気持ちをもって学びたい。)もすっかり胸に刻んで実直に生きていこうと思えます。

末筆ながら、甲府一高同窓会の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



## 健常者と障害者の真ん中にある音楽

1967年3月17日、私は「先天性股関節脱臼」という障害を持って生まれた。詳細は割愛するが、当時は多くの人が完治してい

富山 美由紀「3年9組」  
ミュージック・コア・ミュージキ主宰  
日本音楽療法学会認定音楽療法士  
学校法人身延山学園 身延山大学 文学芸術専攻 特任講師  
学校法人帝京科学大学 帝京福祉専門学校 非常勤講師  
国際ソロフチミスト山梨 会長



幼少期。両足にコルセットをつけて歩行器に乗っていた様子

たこの症状に対し、いわゆる医療事故が原因で、10歳までに10回の手術を重ねるも結局完治には至らず、今日まで不自由を強いられている。

「この子は一生車椅子かも知れません」と医師から告げられた両親は、自宅で生涯の面倒を見られる仕事として、娘にピアノ教師の道を選んだ。年に1度のペースで手術・入院していたため、退院している間に近所のピアノ教室へ2歳から通い、幼稚園や保育園へは通えなかった。初めての「集団生活」は小学校から始まったため、さぞやわがままな生徒であったことだろうと、当時の担任教諭に申し訳なく思う。

「お前は他の子と違うのだから、勉強やピアノを頑張らなければいけない。」と、ことあるごとに両親から諭された。今なら「障害があつて不利であるから、人より余計に努力してやっと一人前」という親の意図がわかるのだが、足が悪いなりに可愛がられて育ったためか、子供時代の私は謎に自己評価が高く、「他の子と違う」私つたら(良い意味で)トクベツ?と大変ポジティブな解釈をしていた。そのおかげか、小・中学時代に結構ないじめにあつた割にはグレもせず、恩師や友にも恵まれ、何とか音楽の道に進むことができた。

音楽療法士への道を目指したのは、ピアノ教室へ

きた生徒さんに精神疾患があると聞いた時だ。「私には病気を治すことはできないが、せめて、してはいけないことくらいは学ぼう」と、音楽の知識や経験が活かせる音楽療法研究所の門を叩いた。学ぶうちに、自分は、もつと重い障害のある方から比べれば健常者に近いが、では五体満足かと言われるとそれも違う。ちょうど健常者と障害者の真ん中に位置する私にしかわかり得ない、双方の橋渡しになるようなアプローチができるのではないかと考えるようになった。

音楽教室には、杖を突いて通う高齢の方も多く、新設した教室は車椅子の方も来られるようスロープなどをつけた仕様にした。

定期的にピアノリサイタルを開催し、クラシック音楽にあまり馴染みのない方々にも楽しんでいただけるような、遊び心のあるトークコンサート形式をとっている。

音楽療法の現場では、対象者が自分の障害などを意識せず、残存能力で楽しめるプログラムを心がけている。また「音楽脳トレ®」という、認知症や介護予防に特化したプログラムを開発し、講演活動を行っている。更に、20年ほど前から女性の奉仕団体に所属し、女性に生まれ



リサイタル風景

たというだけで様々な被害や差別を受け、学習の機会さえ失われている女性と女兒の生活と地位向上のために支援を行っている。

それらの活動の軸になるのは「バリアフリー」。年齢や身体的障碍だけでなく、偏見や差別、文化的な障壁など、努力ではどうにもできないデメリットを少しでも取り除きたいという思いで活動に取り組んでいる。

前述の通り、クラシック音楽やそのコンサートというのは馴染みのない方には、不要に格式ばった、肩の凝る印象があるようだ。だがそのクラシック音楽の作曲家たちも、令和に生きる我々と何ら変わらない恋愛や別離、争いや病気などに悩まされ、翻弄されてきた。そしてその心の有り様を音楽に表した。文化や時代背景などをたどりながら、当時の人々の心に思いを馳せ、その音楽の持つメッセージを伝えていく義務が、我々音楽家にはあるうと考えている。

「継往開来」のテーマを頂いた時に真っ先に浮かんだのは「日々新た」であった。卒業してから今日に至るまで、常に「昨日よりも今日。今日よりも明日へ、新たな気持ちで一歩前に進もう」と考え続け



音楽脳トレ®講演会



音楽教室内観

て来られたのは、多感で好奇心に満ちた高校生活の三年間で「一高生魂」を刷り込まれたおかげだと、心から感謝している。

## 一高つて最高！ （一高は最高の学び場！）



福島 三千代「3年8組」  
話し方教室スピーチスピーチ  
代表

職業に就くとは思いませんでした。人生は面白いものです。

「スピーチ・スピーチ」の経営理念は「意欲ある  
たくましい 人間づくり」

目的は、自分の言葉で心を伝えるスピーチを通じて自信と自己肯定感を高め、多くの自分の強みを見つけ、それを社会貢献につなげることです。ここは学校や職場や家庭でもない第三プレイス。他人からの評価に惑わされず萎縮せずに自分自身と向き合い、教室のステージの上で表現を通じて自分を好きになるための成功体験を積み重ねています。5歳から88歳の仲間が年齢、性別、肩書関係なく区別も差別も利害関係もない空間で一人の人の人として大切なことを学び合っています。25年前、私自身が「こんな場所があったらいいな」を形にした小さな教

室を、社会や地域、そして教室で共に学び合う皆さまに育ててもらいながら現在、私自ら

も日々の学びの中で「双葉」の葉のように皆さまと共に成長しています。

スピーチ・スピーチの『認知行動療法』を取り入れた気づきのレッスンは、自らの気付きを勇気と行動に繋げることにより、心の幸福度と自己肯定感を高め自信を持つことができます。自分を信じて諦めないでチャレンジすること。これが面接突破コース100%のエビデンスです。自分自身や会社を好きになることで企業研修では生産性を高めていきます。

なりたい自分になることは誰にでもできること。『もの捉え方』で人生は変わります。

そして今、あらためて私自身の人生と向き合ってみると、この話し方・コミュニケーション教室「スピーチ・スピーチ」の原点は間違いなく母校、甲府一高だったと確信するのです。

これより感謝の気持ちを込めて大きな影響を受けた学びを記します。

### 1. 大好きのエネルギー

卒業して同窓会に出席する立場になり、改めて多くの卒業生が母校、甲府一高に誇りを持ち大切に思っていることを感じます。愛校心があり「一高」が大好き。

この「大好き」というエネルギーは人生において、



スピーチスピーチの経営理念

とてつもなく大きく輝く生きる力を生み出します。私は高校時代、この『大好き』をたくさん見つけ感じた3年間を過ごしました。携帯電話もSNSもない今みたいに便利ではない時代、他人との距離が近く人情味があり温かく寛大ななかで時を紡ぎました。「おたがいさま」の精神で助け合いフォローしあう環境。大好きな学校、先輩、生徒会活動、先生方、購買のパン、黄色い自転車、ミルキードリンク、友達が作ってくれるクッキー、美術の授業、一高の入口にあった洋楽レコード屋さん、シンディー・ローパー、カルチャークラブ、ピンクハウス、コム・デ・ギャルソン、an・an、セブンティーン、装苑など好きなものに囲まれている毎日のイメージは、まるでお花畑のようです。

きつとそうじゃなかった思い出もあつただろうと思います、すぐに忘れてしまうので前進あるのみ（「苟日新、日日新、又日新」）全てが今の私の糧になっています。

そういえば大好きから始まった「スピーチ・スピーチ」の教室エピソードがあります。

それは一高での偶然のめぐり合わせがきっかけの出来事です。

今から15年前、1人の学生が入会しました。いじめや人間関係のつまりずきがきっかけで、人が怖くなってしまい悩んだ末に行った病院の医師からの紹介でした。顔を上げることができず視線はずっと膝でした。話しかけると



所属していた生徒会本部の先輩後輩と。

下を向いたまま、ポロポロ泣いてしまいます。学校へなかなか登校できなくても、一言も声を出すことができなくても、顔を上げることができなくても、話し方教室は決して休まず皆勤賞です。その姿から、どうにかしたい！変わりたい！という強い意志が伝わってきました。しかし膝を見つめたまま顔を上げることのなかった状況は1年以上続きました。そんなある日、教室でお母様のご相談をお聴きしたときに、私が高校時代、大大好きだった先輩が学校で授業を担当していることがわかったんです。私たちを結ぶ唯一の偶然!!

これはネタにするしかない！と思い「今日は私の秘密を特別に教えるね。内緒だよ！学校にいる○○先生は高校時代、私が大大好きだった先輩なんだよー」と話しました。

すると想像以上のリアクションが返ってきて「えっ！っつ！」と初めての声を出して驚いてなんと！顔を上げてくれたんです。入会から1年。初めてお互いに顔を見た瞬間でした！このことがきっかけで信頼関係が生まれ、それから発声練習で声を出すことや更にはグループレッスンに入ることもできるようになりました。スピーチもどんどん上達し発表会では400人の前のステージで堂々とスピーチをしてくれました。その時の発表会のスピーチタイトルは「両親へのありがとう」スピーチの内容は1人のクラスメイトとのトラブルが原因で、無視や嫌がらせなどのいじめが続く学校へ行くことが怖く苦しくなり、お腹が痛いとか頭が痛いとか嘘をついてお休みを続けていたときでも毎日欠かさずお母さんがお弁当を作って学校へいつでも行けるように準備をしてくれたことに感謝している「ありがとう」そしてスピーチ教室でお父さんと同じ年くらいの皆さんのお話を聴いて、社会で働くことはとても大変だと

知ったこと。働いている大人でもみんな同じように人間関係やコミュニケーションで悩んでいることを知ったこと。お父さんも大変な思いをして家族のために働いてくれていることを知ったこと。お父さんが家族のために一生懸命働いてくれているから生活できるのだと気付いたことを家ではとても恥ずかしくて言えないから発表会で感謝の気持ちをスピーチで伝えます。と、ご両親へ涙をこぼしながら「ありがとう」を届けていました。そして「またこれは福島先生から内緒と言われていることですが高校時代、福島先生が大好きだった先輩が私の学校で先生をしてることを知り、とてもとても驚きました。私は対人恐怖症で顔を上げることができなかったのですが、その告白を聴いたとき、ビックリしすぎて思わず顔が自然に上がったんです。入会後1年以上たつて初めて先生の顔を見てお互いの心が通じ合った瞬間でした。でもこれは秘密の話なのでみなさんも内緒にしてください。」と400人の前のステージで笑いもつていました！

人はいくつからでも、なりたいたい自分になれます。そして私たちの経験には無駄なことは一つもなく、大変で苦しい経験も全てが学びでチャンスなのだと勇氣ある高校生から教えられました。人はどこで誰と出会うかによって運命が変わると思います、私の一高での「大好き」という出会いがきっかけで、言葉を失っていた一人の高校生の人生が変わったことはとても嬉しいことでした。一高で良かったなあと心から思い母校に感謝した出来事です。

## 2. 『傾聴』と『信頼関係』の重要性。

高校時代の思春期、悩んだとき、困ったとき、苦しいとき、先輩や先生がいつも寄り添って心を傾け、話を聴いてくれました。心を表現できない苦し

さは命に関わります。自ら身体から魂を離してしまわれた方の周りの皆さんは『私が話を聴いていれば』『相談してくれば』『声をかけていれば』と重く苦しい十字架を背負ってしまっています。

話ができる人が身近にいることは『生きる力』を生み出します。高校時代、自己開示し安心して相談できるという信頼関係が社会生活で最も重要なことを学びました。自らがSOSを発信し弱さを見せられる強さを持つこと、そしてその強さより『たくましいしなやかさ』を身につけることが、より心豊かに生きるために必要なことだと教えられました。

今、皆さんからしてもらったのと同じように『十四の心を傾けあなたのお話聴きます』という『傾聴』の仕事を通じて恩返ししています。感情のベースは信頼関係です。

### 3. 『言葉』と『心』と『行動』の関係。

卒業式の日、以前担任だった先生に声をかけられました。「三千代、卒業おめでとう。先生は本当に嬉しいよ。色々みんなに心配かけたりしたこともあったけれど、よく頑張ったな。さみしいこともあったけど、先生は三千代から『どんなときも楽しく明るく生きる』ということを教えてもらった。ありがとう。今、勉強はあまり好きじゃないかもしれないけれど、これから大人になって、これだ！というものに出会ったらその時は一生懸命やってみよう。きつとそういう日が来ると先生は信じているよ。」イヤイヤ進学でふてくされていましたが先生から「ありがとう」と言われたことが困ってしまいうような恥ずかしくて嬉しいような気持ちになった忘れられない言葉です。

その後、筑波大学名誉教授、口承文芸学、ドイツ文学の世界的権威の小澤俊夫先生との出会いが

ありました。「昔ばなし」は昔から語り継がれている文字ではない口伝への、かけがえのない日本の文化、先祖との絆であり最高のコミュニケーションだと私は思っています。

小澤先生のお人柄や昔話、グリムの世界にどんな惹かれていきました。学びがこんなに楽しく自分を成長させてくれるのだと初めて気付きました。今年で94歳を迎える小澤先生の研究会に所属し今でも勉強させてもらっています。そしてその学びをスピーチ・スピーチでも生かしています。勉強会へ教室の心の萎縮から成長が思うようでない中学生と出かけたことがあります。「私は先生にお礼を伝えようとすると泣いてしまいうるから私の代わりにお礼と質問をしてくれる？」とお願いをしました。すると勇気を振り絞って私のリクエストに答えてくれました。震える手でマイクを掴み一生懸命話そうとするのですが声が出ません。小澤先生は傍に寄り添い「よくここに来てくれたね。頑張つて手を挙げてくれてありがとう。怖かっただろう勇気を出したね。ゆっくりでいいよ。お話してね。」と言ってくださいました。中学生は「僕には勇気と自信がありません。勇気と自信が手に入る昔ばなしがあつたら教えて下さい」と質問しました。先生は「とても良い質問だね。ありがとう。」いい子いい子をしてくれるのです。そして今年の2月に旅立たれた弟さんである指揮者の小澤征爾さんのお話をしてくださいました。「僕の弟も23歳で貨物船に乗って全く知らないヨーロッパへ行つたんだよ。あーっ弟は怖いものを探しに遠い所へ行つたんだな。と思いがら港から見送つたんだ。君も弟も勇気があるよ。そうそうヨーロッパに怖いものを探しに行く王子の昔話があるよ」と、小澤先生は昔ばなしを語ってくださいました。それがきっかけとなり、その中

学生は自信を持ちスピーチし、大人を信じてくれるようになりました。その後、高校へ進学することもできました。いつ、どこで、誰と出会うかで人生は変わります。これは30年前の卒業式に、もと担任の先生からいただいた言葉、そして「先生は信じているよ」という想いがもたらしてくれたプレゼントでした。もと担任の先生からの心に届く言葉は現実になりました。これだ！というものに出会ったら一生懸命に学ぶ私を先生は信じてくれていたのです。今でも思い出すと涙が溢れます。

日々、感じるのですが『言葉』の前には必ず『心』があります。まず心で感じる事が言葉となり、そして『言葉となつた心』の後ろには『行動』が伴います。思っていることと感じていることと考えることが言葉となり、そして心からの言葉には行動が伴うのだと学びました。自ら発する言葉は自分自身の耳でも聴いています。自らの気持ちから心で決断し言葉にしたことは実践あるのみです。また今、スピーチ・スピーチで一緒に学び合っている学校の先生方の本音のお話を聴くにつれ、自由奔放なわがまま自由人の私のことを先生は少しうらやましく思ってくれていたのかもしれないと感じることもあります。

このように振り返ってみると本当に多くの学びにあふれた感謝でいっぱいファンキーな3年間でした。

それを踏まえ私から在校生や未来の一高生に伝えたいメッセージは、まず他人と比較しなくて大丈夫ということ。もしかしたら他人と自分を比較して優れているところも『自信』という方もいらっしゃるかもしれません。しかしその『自信』は自分よりも優れている人が現れると簡単に崩れてしまいます。揺るぎない『自信』は決して他人との比較

では得られないものです。「自信」とは勇氣を持って自分としっかり向き合って「あなただけ」の素晴らしさに気づくことから始まると私は思うのです。皆それぞれ見た目も心も価値観も違うからこそ「私はこれが好き」「私はこれが得意」「私はこうなりたい」をたくさん見つけること、そして「私はこう思う」「私はこう考える」と自分の言葉で考えや想いを伝えられることが将来の大きな力に必ずつながります。そして、あなただけの強みをたくさん見つけ、それを活かして正々堂々と胸をはって社会貢献する大人になってほしいと願います。未来の自分を信じてください。きっと大丈夫だから。そしてまず行動してみてください。膝を抱えているんじゃないやなくて、旅をするようにお外へ出かけてみてください。すると必ず心が動く経験や出会いがあります。人はいつでも誰と出会うかによって運命が変わります。私がそうであったように今の出会いが、あなたの一生をより豊かにしてくれますよ。

そしてこれからも甲府一高には学力のみならず人間の成長をするうえで『心の学び場』として時代に柔軟に、かつ伝統校としての理念と誇りを大切に未来永劫、輝き続けてほしいと願います。

私自身も第64回甲府中学・甲府一高東京同窓会『継往開来〜繋〜こう未来へ〜』のテーマ通りこれからも甲府一高での学びや旅立たれた恩師、もう会う



スピーチスピーチの外観

ことは叶わない同級生から受け継いだ尊い教えを活かして未来へ繋いでいく努力を重ねます。

ありがとうございます。感謝の気持ちを込めて。

## 筋書きなしのワンダーランド・甲府一高・・・実はみんな一高が大好きだった。



藤原 剛 「3年5組」  
山梨県立吉田高等学校  
英語担当 ラグビー部顧問  
進路指導部

東京同窓会の開催、誠におめでとうございます。東京に卒業生のネットワークが脈々と続いていること、卒業生の一人として誇らしい気持ちでいっぱいです。

私は現在、吉田高校に勤務しており、6年前まで勤務していた

母校を、一歩ひいた立ち位置から眺めております。今回の寄稿の依頼を受けた時、卒業生としての視点、教員としての視点、書きたいこと、書くべきことが次々と現れては消え、また同じことが現れ、本当に悩みました。母校・一高での生活を生徒としても、教員としても全力で駆けぬけた一人の人間の、複雑な思いの一端を、少しでも皆様と共有できたら幸いです。

○一高合格？・・・兄の喜びように逆に戸惑ういわゆる総選世代で、一高はたまたま振り分けられたにすぎないのですが、一高を卒業して既に大学

生になっていた兄が、たまたま帰省していて、非常に喜んでくれたのを覚えています。高校時代のサッカー三昧から一転して、大学では合唱部に所属していた兄が、「応援練習があるから、ちゃんと覚えんとな」と言って、さっそく校歌や応援歌と一緒に練習してくれた（させられた）のに戸惑いました。実は私は別の高校に入学してやりたいことがあったのですが、そんな落胆もお構いなしの兄の喜びのように、一高の「特別感」を垣間見たように思います。サッカー一色の高校生活に思えた兄の高校生活も、何か特別なものに彩られていたようです。兄も一高が大好きでした。ちなみに私も後に、従妹や姪が一高に決まると、喜んだものでした。

○「自由」の一言では表現しきれない高校生活・・・伝統は小事に揺るがず。

いろいろな見方があるのでしようが、高校生活を通して細かいことでガミガミ言われた記憶がほとんどありません。もちろん流石にこれは怒られるだろう、という場面では愛情の溢れる『ムチ』を頂戴しましたが、（時代が違いますので、コンプライアンスはOKです。）納得はしても不満に思うようなことは一切ありませんでした。それを除いては、本当に自由に任されていました。時は『ビーバップハイスクール』という漫画の連載が始まった頃です。あの時代にあつて、服装検査がなかったというのは信じられないことです。しかし、そんなことは当時既に百年をゆうに越えていた一高の歴史からすれば、どうという事はなかったのでしょうか。これは、時代を先取りしていたと思います。（教員時代の思い出として、あとで言及します。）

一高の懐の深さゆえの自由の例をいくつか挙げたいと思います。

○部活動、、、、広さも深さも思いのままに。「楽しんだもん勝ち」

「トンコウに行ってラグビーをしたい。」

このわずか15音の言葉を友人に発したことが、中学時代の先輩に伝わり、私の高校生活の方向性は決定づけられました。新入生オリエンテーションの日の午後には、早くもラグビーボールを持って走り回っていたのです。しかし、どちらかというと『堅物』だった部類の私の高校生活は、この部で巡り合った仲間（先輩も後輩も含めて）のおかげで、本当に幅が広がったと思います。楽しかったのひと言です。おかげで愛のムチをいただく目にも遭いましたが、そういう事こそ若い時に経験するべきことで、むしろ高校生活のハイライトですらあったと思います。但し、適当な部活だったわけではなく、同じく母校をこよなく愛するOBの先輩方（日川に勝っていた時代の方々です）のおかげで、勝つ喜びも味わうこともできました。『ベスト4に入ったら、グラウンドにゴールポストを建ててもらえる』この呪文のような約束に突き動かされて、とうとうグラウンドにゴールポストを建てていただけた時の感動は忘れません。生徒とそんな約束をして、守ってくれる学校がどれほどあるでしょうか。（部がなくなら、ゴ



ルポストが撤去されているのを見たのも悔しかったです。しかたないですね。）

ところで私はラグビーと落研を掛け持ちしていた先輩に誘われて（騙されて？）2年から落研にも入り、7時までラグビー、9時まで落研という生活を送り、県民会館で発表会を開催したほか、学園祭新入生歓迎会などでも大喜利や落語を発表して楽しみました。これも決してキツクなどなく、高校生活の彩りを増してくれた大切な思い出です。落研がある学校など他になく（総文祭にも落語部門はありませんし）、ここまで部活動を堪能できるのは、一高だけだったでしょう。

○進路指導、、、「頑張ったもん勝ち」、、、しかしちゃんと考えていてくれた。

私は国立大学入学を目指し、それなりに高い志望を掲げていました。部活がそんな風でしたから、塾や予備校に通えるはずもなく、自分で学習に必死に取り組んでいました。一般的に言って、普通の進学校で、そういう生徒が夜9時まで部活をやっていたら、多分担任の先生は、改善を促すように指導をします。しかし、落研のOBの方と一緒に街にいる所を見たよ、などと声掛けをしてくれて、きちんと把握していたはずの先生は、何も言わず黙って見守っていてくれました。そして、最後の最後、共通一次が上手いかわず悩む私に、母校となる大学を進めてくれたのは、担任の故・保坂憲治先生でした。「英語の教員になればいいんだろう。ここまでの頑張りを活かせる所に行ったらどうだ？」この言葉のおかげで、志望校でもなかった大学での生活を、大事に思うことができました。

確かに無駄にしたいくないだけの努力をしたと思います。徹夜で学習した翌日に強豪校との練習試合

に出場するなど平気でした。今思い出しても、物凄い体力です。人間ここまでやっても大丈夫なんだな、というラインがかなり広がったこうした経験は、仕事においても苦難に立ち向かう時に背中を押してくれています。

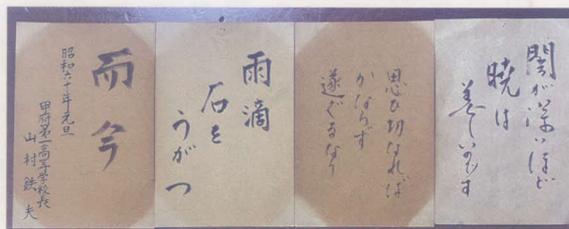
皮肉でも何でもなく書きます。先年、残念ながら現職の教頭として先年、鬼籍に入られた、崎田 哲君は同級生ですが、大学に入学するまでに4年を要しています。私と逆の例ですが、普通、そういう

志望を持っている生徒が、それに沿った取り組みをしていなかったら、先回りして警告を与えつつ指導をするのが進学校の教員というものです。現役生としての受験は上手くいかなかったかもしれませんが、崎田君も私とは別の方向で、一高生活を楽しんで、彼は教頭を務めるだけの見識を持って、母校に戻るわけです。

私の場合も、崎田の場合も良い意味で「泳がせておいてもらった」ので、その後生きる、広い意味での学習ができたと思います。これぞ真の進路指導ではありますまいか。（後に、これと矛盾する話を書きますが）

○一高に勤務して思う。これからの一高を支える先方に、切なるお願い。

生徒時代半分、教員時代半分と思っていました。が大分生徒時代の思い出に文字数を割いてしま



ました。僭越ではありますが、これからの一高への思いを、勤務時代を振り返りながらできるだけコンパクトに書かせていただきます。

・Be Gentlemanを貫いてほしい、服装指導。

勤務時代、生徒指導主事が集会で必ず言及したのが「Be Gentleman」という言葉で、自分で判断しなさいという、主旨でした。それで良いと思います。流石に服装検査はありましたが、最低限のものであったと思います。（規則を破る事には、私も厳しく指導しました。）

ただ、私は密かに「くるぶしソックス事件」と呼んでいるのですが、降って沸いたように、突然「制服に合わないからくるぶしソックス禁止」という指示が来たことがあります。学年主任だった私は、「普段言っていることと違うじゃないか。生徒に判断させる。」と生指主事にかみつき、職員室中に響き渡る声で大喧嘩をしました。

昨今「ブラック校則見直し」という言葉に代表されるように、細かい校則を見直すことが時代の流れになってきました。思い思いの服装で過ごしていた高校時代の仲間も、立派に社会人として活躍しています。近視眼的な、先回りをした生徒指導は控えるべきだという考えに私は大賛成です。時代が一高に追いついてきた、と私は思いたいのですが、いかがでしょうか。

・進路実現が高校の使命。

悔しいことに、某学習塾が高校のランキングを作り始めて以来、一高は他校の後塵を拝しています。私の勤務時代、よく喧嘩の相手をしてくださった赤池校長先生は「あんなもので高校の価値を測っては

いけない」とおっしゃられていました。心から賛成します。実際、強行遠足が小諸にゴールを戻して以来、苦行を自らに課すことを好む、個性豊かな生徒が入学してくるようになったと思います。

矛盾するようですが、そういう生徒たちだからこそ、多少の無理をさせ、彼らの高い進路目標をかなえるよう導いてやれる学校になって欲しいと思います。私たちが謳歌させてもらった、昭和の自由な進路指導の反動からか、その辺りの進路指導の戦略性に欠けている面が、私が赴任した頃はあり、進路主事を務めた私も責任を感じています。今はどうでしょうか。

「二高では進路希望はかなわない」と思われたくはありません。進路指導についてよく研究し、決して近視眼的にはならず、戦略的に低学年時から試験を課すことを、後輩のために卒業生としてお願い申し上げます。

○最後に、みんな一高を愛していた。

最後に勝手なことを書いてしまいました。勤務していたころ、卒業生だから熱心に指導するのだと言われる事が本意でした。教員として当然の使命だろうと思っていました。しかし、正直に書きます。確かに私の中に「一高DNA」があり、ある時琴線に触れると、それがブルッと震えるのです。本当に当時ご迷惑をおかけした皆様にこの場を借りてお詫びを申し上げます。

しかし、「一高DNA」は私だけのものではないと思います。同窓会の幹事を務めた1年間、大勢の仲間と「一高論」を語り合いました。そして、思ったものです。みんな、そんなに一高を好きだったわけ？私自身、在学中に「一高愛って何？」なんていうアンケートがあり、「は？」と思ったものでした。

卒業して、高校生活が遠ざかるほどに、一高生活で得たものがいかに特別だったか、みんなかみ締めているのではないかと思

います。  
チーム60（ロクゼロ）一同、今は隠さず一高愛を、様々な形で発揮しています。これからもみんな、母校を支えていきたいと思ひます。迷った割には、長々と失礼いたしました。



山村校長にお願いして直々に書いて頂いた色紙。宝物の一枚。

## 継往開来〜繋ごう未来へ〜 『想像を超える未来を切り拓く』



山口 雅男「3年1組」  
キャンノンマーケティングジャパン株式会社 執行役員  
ビジネスパートナー事業部長

第64回甲府中学・甲府第一高等学校東京同窓会にあたり、『継往開来〜繋ごう未来へ〜』をテーマに寄稿を依頼されましたので、大変僭越ではありますが、私の今までの経験を活かして少しでもお返ししたいだけだと思います。

私は甲府一高を昭和60年に卒業、その後県外の大企業へ進学、東京の企業（メーカー）に就職しました。思い返すと高校時代は部活に明け暮れ、友人

と遊ぶことが大半を占めており、勉強にはほとんど向き合わずに生活を送ってきたと思います。

そんな私も運よく大学に進学し、理系だったこともあり工学部で精密機械工学を専攻しました。

大学4年間は、よく遊び・よく学び?であったと記憶が操作されていますが、高校時代からの友人も多く上京していましたし、新しいたくさんの人との出会いもあり、ここでは書ききれないくらいの貴重な経験をさせてもらう事で、楽しい4年間を過ごすことが出来たと感じています。

就職活動が始まり、甲府に戻るか?そのまま東京に残るか?人生の大きな選択となりましたが、結局東京での就職を決めました。高校時代は理系を選択し、そのまま大学も工学部へ進学ではありましたが、何故か技術職を避け営業職を選択した就活となりました。将来に向けて何か具体的にやりたいことがあったわけでもありませんが、当手を振り返ると自分の感性を信じて、ただただ突き進んでいただけだと思います。



入社後は東京本社にて思いもよらず技術関連部署に配属となりました。少し不満や不安はありましたが、まずは与えられた仕事を期待以上にこなし、

自分自身を成長させ、いつか希望する部門への異動を思い描きながら必死に業務遂行したことを思い出します。

5年ほどの時を経

て営業職へ異動となり、思い返すとこれが私の大きな人生の転換点となりました。

自身で思い描いていたモノとは大きく異なり、非常に厳しくシビアな世界が繰り広げられており、日々日々業務についていくのがやっとであったと思います。また、全国に拠点がある会社ですので、私自身もいくつもの転勤を経験しました(東京・新潟・大宮・松山・岡山・広島・金沢・名古屋・そしていま東京)。多くの拠点を回って大変だと思われるかも知れませんが、これが私の財産となっていると言っても過言ではありません。赴任地の同僚・取引先・現地の友人たちとの出会いが私を大きく成長させてくれましたし、今でも永いお付き合いをさせていただいている方も多くおり、感謝の気持ちで一杯です。

さて、このような時が流れていく中、2020年にコロナ禍という未曾有のパンデミックにより世界中が大混乱となりました。私の担当業務においては、半導体不足による主力製品の大規模な生産遅れによりお客様にモノが届けられない状況が続き、それが充足されたのは今年の5月頃と長い期間を要しました。また、社内においては在宅勤務・リモートなどが急速に進み、今までとは全く違った景色になり、人と会う事もあまり許されず、どうしたら良いかわからずに戸惑いながら生活を送っていたのが、ついこの間のように感じます。

このような状況の中、社内においても新しい思考・新しいやり方・新しい価値提供など、さまざまなものが見直され、今までの延長線上では今後のビジネスが展開できないところまで追い込まれました。先人が積み上げてくれたものだけに頼るのでは

なく、新しいビジネスの軸を速く!創り上げることが我々の直面した課題となりました。我々は今まで以上にモードチェンジし、市場環境の変化に対応した、顧客価値提供を強く推進していかなければなりませんでした。我々のお客様は通信環境の整備、データ共有/管理、情報セキュリティ対策、勤務管理など、この状況に適応した働き方の推進にたくさん課題を抱えておりますので、お客さまに寄り添い、お客さまが実現したい事をしっかりと捉えたビジネスを進めて、お客様との接点を更に強く新しいビジネスを獲得し、我々が得意としてきたビジネスにも繋げ、既存事業を丁寧に守り、新しいビジネスを広げていくことが、携わるすべての人たちの成長に繋がると考えています。

先人たちが創り上げた土台をしっかりと受け継ぎ、更に強い新しい土台を創り上げて、今以上に強い基盤に仕立て上げ、後輩たちにバトンを渡していくことが私の大きな役割となっています。まだまだ志半ばではありますが、残り少ない会社生活で、多くの人たちが幸せになれるようなビジネスを展開できるように誠心誠意努めようと思っています。

とめどもない話になってしまいましたが、私のつたない経験を踏まえて少し書かせていただきました。

最後にもう少しだけお話しさせていただきます。

第64回東京同窓会開催において、そのタイミングという訳ではありませんが、昨年東京に戻ってくることとなり、20数年いや、30数年ぶりに当時の同窓生と会う機会が増え、とても懐かしく、とても嬉し

く、また、とても刺激的な日々が増え、本当に感謝・感謝・感謝です。いつの時でも同級生は同級生です。また、このように寄稿する機会もいただき心より感謝しております。

第64回東京同窓会を全員で盛り上げ、甲府一高の伝統が多くの人に受け継がれ、みなさまとみなさまの大切な人が幸せになるよう祈念しております。ありがとうございました。

## 経験から学び、そして伝える



渡辺 俊一「3年3組」  
株式会社日立ハイテク コア  
テクノロジ製品本部

昭和60年3月に甲府一高を卒業後、ロボット開発エンジニアになることを夢見て名古屋大学工学部電子機械工学科に進学した。大学では電気/電子工学や機械工学といったメカトロニクスの基礎を学び、4年時には「光計測」の研究室に配属された。研究テーマは「レーザー光を利用して、1ミクロン以下の小さい変化を測る新技術の開発」であった。自ら調べ、考えて装置を設計し、組立てながら研究できたことは楽しかったし、勉強になった。また、良い恩師にも恵まれたこともあり、大学院に進学して研究を続けた。博士課程(後期課程)修了まで、合わせて9年間名古屋大学で充実した学生生活を送ることができた。

大学院修了後は現職場(当時は日立製作所計測器事業部)に入社し、以来30年間「電子顕微鏡」と

いう装置の設計開発に携わっている。「電子顕微鏡」は1930年代に発明され、以来多くの研究者が長年にわたり研究をされてきた。この技術を会社の先輩方が創意工夫による開発、改善を重ね。私の入社当時には既に製品として完成されていた。私はその性能や信頼性を高めることに加え、より使い易くするための装置開発を行ってきた。その結果、30年間で装置の外観やシステムは大きく変化した。一般に販売されている電気製品と同様に電気と機械の箱の集まりだった見た目は洗練されたデザインに進化した。また、当時は専門家の手を介して操作していたが、現在は自動で観察できるようになっただけでなく、観察したデータや写真も自動で整理できるようにになっている。これらの進化はパソコン(半導体)や制御ソフトなどの技術の進化が大きく貢献していると感じている。

これに対して性能や信頼性を高める開発は多くの試行錯誤を重ねる必要があった。開発の過程で壁に当たった時に、先輩方の経験を直接本人から伺うことや、先輩方が残した資料を調べることで多くの知見を得ることができた。自分と似た失敗をした先輩との会話から解決するアプローチのヒントを得ることができた。また、同じ失敗を繰り返さないために注意すべきことを知ることができた。その結果、ゆっくりとしたスピードであったが確実に性能や信頼性は向上しており、これからも更なる向上を目指して開発は継続されている。

私が社会人生活を送った30年はバブル経済の崩壊から始まる「失われた30年」と呼ばれる期間とほぼ一致している。しかし、私にとってこの30年は決して失われただけではなく、前述の通り得ることも多い30年だった。今思えば、経験や知見を蓄えるための雌伏の期間だったとも感じている。これからの

私たちの世代の役割は先輩諸兄の経験に加え、私たちの経験を後輩に伝えることであると思う。現在社会では情報伝達の手段は多岐に渡っているため、大事な情報を確実に伝える手段を選択することが重要だと思う。ものを残して経験を伝える最適な手段については現在模索中である。

最後になるが、大学時代も社会人となってからも、決して順風満帆ではなく、うまくいかないことの方が多かった。そのような場面に遭遇した時には強行遠足など一高で経験したことを糧にして粘り強く戦ってきたと自負している。その結果、楽しい人生を送ることができている。今後も色々な場面に遭遇すると思うが、前向きに対処しようと思っている。

同窓の皆様におかれましては一高を卒業して以来、私より深く数多くのご経験をされていると思います。いつの日か皆様のご経験を聴き、語り合う機会に出会えたら良いと感じております。いつかきつと実践しましょう。

最後になりますが、皆様のご健勝をお祈りしております。



年に1回だけですが盲人の方の伴走を務めています(本文には関係無いですね)

# 祝 第64回 甲府中学 甲府一高東京同窓会

来年度、甲府中学・甲府一高東京同窓会の当番幹事を担当させていただきます。  
皆様方のご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。(甲府一高昭和61年卒業生一同)



卒業あしてから会れえてない同級生とがいるも

毎月いつも会つえてる親友ともいる

同窓会たまには会まえてる友とがいる

先に旅立とつてしまもったあといもつももいる

でもみんなまた逢あえるよね

さよならのあとでもできること応援します

# 法事の窓□<sup>®</sup>

代表取締役 中村 哲 (昭和六十年卒)

日新鐘2024

# 協賛会社協賛者 (敬称略)

本年も多数のご協賛をいただき、誠にありがとうございました。

●アーキシップ帆

佐藤 守 (昭和52年卒)

●浅利クリニッケ

浅利 秀男 (昭和40年卒)

●株式会社アールピージー・ラボ

窪田 司 (昭和52年卒)

●荒木太紀子

池田 秀雄 (昭和43年卒)

●石井 孝明

今福 勝 (昭和59年卒)

●太田 清士

大森商会 (昭和57年卒)

●岡島加代子

荻野 正吾 (昭和59年卒)

●小田切 仁

笠井 收 (昭和39年卒)

●株式会社 キタジマホーム

北野 義和 (昭和60年卒)

●串揚げ深澤亭

59会有志一同 (昭和59年卒)

●小泉 敦夫

(昭和29年卒)



伊豆のうみは、伊豆高原・浮山温泉郷、閑静な高級別荘地の奥にひっそりと佇む、自然豊かな小さな料理宿です。伊豆に集う本物の素材、旬の食材をふんだんに使った最上の美食。「美味しい」がなにより癒しとなり、旅を彩る思い出となり、忘れられないおもてなしとなります。

- 客室数六室(全室露天風呂付)
- 貸切露天風呂有
- 個室お食事処

## 料理の宿

# 伊豆のうみ

IZU no UMI



TEL 0557-54-0102

〒413-0232 静岡県伊東市八幡野1741-204

美食の館として多くのファンを有したホテル東京。おもてなしの総てを注ぎ込んだ旨し宿。

## 四季の旨しもの料理理めて。

- 客室数七室(全室露天風呂付)
- 貸切露天風呂有
- 個室お食事処

伊豆の花は、竹林に囲まれた大人の隠れ宿。旬の味覚、伊東漁港直送の朝獲れ地魚、伊豆産の柑橘類や地元の新鮮野菜を使い、匠の技が織り成す四季の会席料理。客室露天風呂から望む景色の先には伊豆大島。ぜひ、日常から離れ、最高の癒しと贅沢なくつろぎのときをお過ごしください。

## 料理の宿

# 伊豆の花

IZU no HANA



TEL 0557-51-4187

〒413-0231 静岡県伊東市富戸1169-20



●(有)サイキ商事

レストランバースAIKI

齋木 雅司 (昭和63年卒)

●さいとうクリニック

齊藤 昭人 (昭和47年卒)

●崎田 哲 (昭和60年卒)

●佐野 直樹 (昭和54年卒)

●島田 敏男 (昭和52年卒)

●鈴木 宣昭 (昭和36年卒)

●妹尾 園子 (昭和60年卒)

●田中 美和 (昭和59年卒)

●谷口百合子 (昭和36年卒)

●出羽 隆治 (昭和60年卒)

●第65回甲府中学・甲府一高東京同窓会

準備会

幹事長 中村 哲也 (昭和61年卒)

●福田三起子 (昭和60年卒)

●VECTOR株式会社

小山 久枝 (昭和48年卒)

●本多 明美 (昭和60年卒)

●南牧スキークラブ首都圏チーム

(同窓生5名在籍)

代表 大澤 敬造 (昭和59年卒)

●山口 雅男 (昭和60年卒)

●山本 秀彦 (昭和41年卒)

●矢野 秀樹 (昭和52年卒)

## 日新鐘2024

# 広告目次 (敬称略)

本年も多数の広告掲載  
誠にありがとうございました。

●アース・リサーチ (有).....53

●IJPOWERS (株).....61

●(有) アウテリアあかさわ.....57

●青柳広美.....63

●一級建築士事務所アクシスアーキテクト

●(株) アセツツアールアンドデー.....61

●あとべ心のクリニック.....55

●アネシス経営労務研究所.....59

●(有) アンリミット・ジャパン.....54

●いざかや甲州屋.....61

●合同会社イズマタ.....62

●いとう石材.....60

●(株) うちだ.....61

●内田クリニック.....47

●hrkgolf.....63

●おぐちこどもクリニック.....56

●(株) 甲斐國.....45

●カーサ・フェルテ.....45

●カフェ&パスタクル.....60

●(有) キタムラ.....53

●キュイエット.....59

●草津温泉.....58

●GRACEWINE.....47

●ケイカンパニー.....55

●(株) 京葉マツヤデンキ.....45

●(有) 小穴鑄造所.....60

●甲府一高あおぞら会.....58

●甲府一高空手部有志.....62

●甲府一高湘南同窓会.....57

●甲府一高東京50会.....60

●甲府一高59会.....44

●甲府一高昭和60年卒バドミントン部

●甲府一高昭和61年卒業生一同.....38

●医療法人社団孝和会能見台パトリア

●国際建設(株).....56

●五光電工(株).....62

●(株) コスモエナジー.....59

●後藤染工(株).....54

●さいとうクリニック.....61

●(株) 境川カントリー倶楽部.....59

●茶房どんぐり.....61

●(株) サンテック.....55

●山日YBSグループ.....59

●NPO法人C&Cクラブ.....54

●(株) JMKMARUFUKU.....51

●(株) シオザワ.....61

●清水喜彦.....59

●シミックホールディングス(株).....52

●(株) SHOEI.....61

●(株) 少國民社.....51

●昭和42年卒一同.....61

●昭和48年卒有志.....59

●昭和53年卒業生一同(東京53会).....58

● 昭和57卒東京同窓会一同 (Team 57 TOKYO) .....	55
● (株) 昭和鉄工 .....	62
● 食卓Labo88 .....	52
● 鈴木製菓(株) .....	58
● スナック es .....	62
● 住友不動産(株) .....	61
● 生徒会本部・応援団・吹奏楽部合同	43
● 太子堂薬局 .....	62
● (有) 太陽設備システム .....	62
● 泰和電気工業(株) .....	54
● (株) 高野塗装店 .....	57
● (株) タカラレーベン .....	56
● 武田神社 .....	63
● (株) たけまる .....	60
● TEAMロクゼロ甲府一高昭和60年 卒業生 .....	表3
● (有) デイレクターズ東京 .....	56
● (株) でり坊 .....	61
● 東京三一会有志(6社) .....	45
● 東京三五会 .....	59
● 東京四四会 .....	49
● 東京47会(昭和47年卒)一同 .....	61
● 東京49会 .....	54
● 東京51会 .....	49
● 東京一高S58 .....	46
● (株) 東和 .....	57
● DoQuest .....	59
● (株) 常磐ホテル .....	53
● 都立大ペインクリニック .....	62

● (株) 内藤ハウス .....	52
● (有) 中川看板店 .....	60
● 中澤経理事務所 .....	53
● (株) 中嶋文夫プラスデー・エイ 設計事務所 .....	57
● (株) 中村 .....	54
● 軟式テニス部女子(S60年卒) .....	62
● 201ゴルフ会 .....	53
● 二宮公俊(株) ジェム・フォース	46
● 日本情報産業(株) .....	61
● 財団法人 日本盲導犬協会 .....	45
● 宗教学人 入明寺 .....	56
● (株) ニュー平和 .....	57
● ネットトヨタ甲斐(株) .....	58
● バード国際特許事務所 山梨オフィス	60
● (株) はくばく .....	48
● 話し方コミュニケーション教室 〔スピーチ・スピーチ〕 .....	51
● (株) 早野組 .....	表2
● バスケネットボール部OB・OG .....	50
● 一高前パン写真館 .....	60
● (有) ピーチ専科ヤマシタ/ 桃農家カフェラ・ペスカ .....	56
● ひはらくリニック .....	57
● (有) フィッシュランドイシハラ .....	62
● foo(フー) .....	52
● フォネットグループ .....	51
● 深澤内科クリニック .....	60
● 富士観光開発(株) .....	61
● 富士急行(株) .....	48

● 藤原建築設計事務所 .....	60
● (株) プティック社 .....	50
● (有) FLAT .....	50
● (株) ベストアドバイス .....	59
● 法事の窓口 .....	39
● (株) ホテル東京 .....	40
● (株) まほら .....	62
● (株) マリアージュ .....	58
● まるい林材 .....	51
● ミートプラザよだ .....	60
● ミキ建設 .....	60
● (株) 緑が丘設備 .....	61
● (有) 宮川レッカー .....	60
● 医療法人社団 望月耳鼻咽喉科 .....	62
● (株) やさしい手甲府 .....	48
● (株) 柳川芳鉄工所 .....	55
● (株) 山市成工 .....	62
● 山梨クラリオン(株) .....	62
● (株) 山梨新報社 .....	62
● (株) 山文 .....	45
● (株) UG都市建築 .....	57
● ユタカ電機(株) .....	60
● 社会福祉法人 四つ葉福祉会 .....	61
● リーガルエキスパート司法書士事務所	60
● 林野内科医院 .....	58
● (株) ワイ・ジュエリー .....	49
● (有) 若月建設 .....	62
● 特定非営利活動法人 わたげの会 .....	47

## 編集後記

今年の1月、久しぶりに甲府一高の正門に立った。これから始まる当番幹事の活動もあり、久々に母校を訪れてみたい、という気持ちになったのだ。お世話になった恩師の笑顔、忘れられない同級生の制服姿、色々な思い出が、卒業して40年経った今でも、鮮やかに思い出される。

日新鐘Vol.30を作成し、今年の東京同窓会を運営するにあたり、我々昭和60年卒のメンバーは「TEAMロクゼロ東京」を結成した。テーマは「継往開来～繋ごう未来へ～」である。諸先輩方の事業を受け継ぎ、発展させながら未来を切り開こう、と一致団結し、準備を進めてきた。役割分担をし、毎月のミーティングを重ね、色々な意見を出し合ってきた。時にはぶつかり合い、時には励まし合い、その絆を深めてきたように感じている。1人では解決できない問題は、チームで取り組

み、乗り越えてきた。

日新鐘Vol.30の発行にあたり、多くの方々から広告・協賛のご協力をいただき、心より感謝申し上げます。また、寄稿については、急なお願いにもかかわらず、多くの方々へ快く対応していただき、重ねて感謝申し上げます。いくつもの力が集まり、この日新鐘Vol.30が出来上がりました。色々な事が手探りの状態でしたが、多くの皆様方からのご支援・ご協力に励まされ、心温まる思いが致しました。編集・印刷をご担当いただきました少國民社様、本当にありがとうございました。

～繋ごう未来へ～TEAMロクゼロ東京より、来年の当番幹事の皆様へ、心よりエールを送り、編集後記とさせていただきます。

### 令和6年度当番幹事(昭和60年卒)

幹事長	古川淳大
事務局長	五味春彦
副幹事長	齊藤透 本多明美
事務局	五味春彦 古川淳大 本多明美 齊藤透 福田三起子 保坂智美 妹尾園子 柴田知実 鎌田研 中村哲
会計部会	福田三起子 齊藤透 古川淳大 本多明美 中村哲
広告部会	齊藤透 中村哲 向井誠二 荻原みほ 本多明美 福田三起子 妹尾園子 柴田知実 北村賢治 秋山尚之 立川健一 三井雅之 中村和雄 福島三千代 望月秀浩
記念誌部会	鎌田研 雨宮透修 荻原みほ 柴田知実
懇親会・会場部会	鎌田研 保坂智美 荻原みほ 福田三起子 出羽隆治 古川淳大 本多明美 妹尾園子
広報・IT部会	小宮山亮 五味春彦 鎌田研 雨宮透修
一紅会担当	本多明美 福田三起子 柴田知実 保坂智美 荻原みほ 妹尾園子
甲府担当	北村賢治 立川健一

印刷：株式会社 少國民社

# 第64回 甲府中学・甲府一高東京同窓会

ご参加された同窓生の皆さま  
ご支援ご協力をいただいた皆さま  
ありがとうございました



山花開似錦

曹源一滴水

